

千葉県文化財センター

研 究 紀 要

22

平成13年 9 月

財団法人 千葉県文化財センター

発刊の辞

財団法人千葉県文化財センターは、昭和49年11月の創立以来、埋蔵文化財に関する数多くの調査、研究、普及活動を実施してまいりました。その成果は、発掘調査報告書をはじめとする多数の刊行物等に見られるとおりです。

研究活動につきましては、研究紀要の刊行をはじめ、埋蔵文化財調査に関連する研究事業を行ってまいりました。昭和50年度に第1号を刊行しました研究紀要は、以来第1期から第4期に分けて共通のテーマを設定し、これまでに21冊を著しました。この間昭和60年度には「創立10周年記念論集」・平成6年度には「創立20周年記念論集」を刊行するなど、房総文化の解明に努めてまいりました。

当センターでは、数多くの遺跡を調査し、調査報告書や研究紀要を通して各時代・各分野の様々なデータが多量に蓄積されてきました。しかしながら、昨今の発掘調査により、新事実が解明される一方においては新たな課題や問題点も生まれ、これらの資料を整理し分析することが課せられております。

このため、第5期ではこれまでの研究紀要ではとりあげられていなかった各時代の遺跡、遺物、文献等の資料集成を主とし、「各時代における諸問題」と題して新たに展開することとしました。

研究紀要22号「尖頭器石器群の研究」は、本シリーズの成果報告の第1冊目として刊行いたしましたもので、本書が考古学研究はもとより、埋蔵文化財調査の技術向上のための一助として広く活用されることを期待してやみません。

平成13年9月

財団法人 千葉県文化財センター

理事長 清水新次

目 次

尖頭器石器群の研究

— 各時代における諸問題 1 —

はじめに	3
序 章	5
第1節 はじめに	5
第2節 房総半島における尖頭器石器群の研究史	7
第1章 尖頭器石器群の分布と時間的推移	17
第1節 尖頭器石器群の技術形態学的検討	17
第2節 尖頭器石器群遺跡の分布と構造	27
第3節 尖頭器石器群の編年	40
第2章 尖頭器石器群の石材消費戦略	49
第3章 自然科学的手法による分析	65
第4章 尖頭器石器群の歴史的評価	101
附 章 資料・データ集	109
第1節 尖頭器出土遺跡分布地図・地名表	109
第2節 主要遺跡出土資料実測図	188
第3節 文献目録	250
1. 文献目録A	251
2. 文献目録B	303
写真図版	

挿 図 目 次

1-1 尖頭器石器群の技術形態学的検討

第1図 尖頭器A形態比較図(1)	23
第2図 尖頭器A形態比較図(2)	24
第3図 尖頭器B形態比較図	25
第4図 尖頭器C形態比較図	26

1-2 尖頭器石器群遺跡の分布と構造

第5図 石器集中地点を形成する遺跡分布	27
第6図 礫群を形成する遺跡分布	28
第7図 石器集中地点の類型(1)	31
第8図 石器集中地点の類型(2)	32

第9図	石器集中地点の配置	36
第10図	有樋尖頭器石器群と黒曜石製小型尖頭器石器群の分布	38
1-3 尖頭器石器群の編年		
第11図	尖頭器編年図(1)	46
第12図	尖頭器編年図(2)	47
2 尖頭器石器群の石材消費戦略		
第13図	割出し系小型石槍の製作工程を示す接合資料(袖ヶ浦市百々目木B遺跡)	55
3 自然科学的手法による分析		
第14図	クラスター分析による分類結果	81
第15図	黒曜石原産地推定分析資料出土遺跡分布図	89
第16図	黒曜石原産地推定分析資料実測図(1)	90
第17図	黒曜石原産地推定分析資料実測図(2)	91
第18図	黒曜石原産地推定分析資料実測図(3)	92
第19図	黒曜石原産地推定分析資料実測図(4)	93
第20図	黒曜石原産地推定分析資料実測図(5)	94
第21図	黒曜石原産地推定分析資料実測図(6)	95
第22図	黒曜石原産地推定分析資料実測図(7)	96
第23図	黒曜石原産地推定分析資料実測図(8)	97
第24図	黒曜石原産地推定分析資料実測図(9)	98
第25図	黒曜石原産地推定分析資料実測図(10)	99
第26図	黒曜石原産地推定分析資料実測図(11)	100
附-1 尖頭器出土遺跡分布地図・地名表		
第27図	尖頭器石器群出土遺跡分布図(1)	179
第28図	尖頭器石器群出土遺跡分布図(2)	180
第29図	尖頭器石器群出土遺跡分布図(3)	181
第30図	尖頭器石器群出土遺跡分布図(4)	182
第31図	尖頭器石器群出土遺跡分布図(5)	183
第32図	尖頭器石器群出土遺跡分布図(6)	184
第33図	尖頭器石器群出土遺跡分布図(7)	185
第34図	尖頭器石器群出土遺跡分布図(8)	186
第35図	尖頭器石器群出土遺跡分布図(9)	187
附-2 主要遺跡出土資料実測図		
第36図	千葉市緑区有吉遺跡第4文化層	189
第37図	千葉市緑区南河原坂第3遺跡A~C地点	190
第38図	千葉市緑区南河原坂第3遺跡D地点(1)	191
第39図	千葉市緑区南河原坂第3遺跡D地点(2)	192
第40図	千葉市緑区南河原坂第3遺跡E地点・H地点(1)	193

第41回	千葉市緑区南河原坂第3遺跡H地点(2)・J地点(1)	194
第42回	千葉市緑区南河原坂第3遺跡J地点(2)	195
第43回	千葉市緑区弥三郎第2遺跡	196
第44回	千葉市緑区六通神社南遺跡(1)	197
第45回	千葉市緑区六通神社南遺跡(2)	198
第46回	市原市草刈遺跡M区	199
第47回	市原市武士遺跡第7文化層A1(1)	200
第48回	市原市武士遺跡第7文化層A1(2)・第7文化層A2(1)	201
第49回	市原市武士遺跡第7文化層A2(2)	202
第50回	市原市武士遺跡第7文化層B	203
第51回	市原市南原遺跡(1)	204
第52回	市原市南原遺跡(2)	205
第53回	八千代市権現後遺跡第3文化層	206
第54回	八千代市坊山遺跡第1文化層S39地点	207
第55回	八千代市坊山遺跡第2文化層S95・96地点	208
第56回	八千代市坊山遺跡第2文化層S73地点・八千代市井戸向遺跡S2・3ブロック	209
第57回	船橋市西の台遺跡ユニット1～5(1)	210
第58回	船橋市西の台遺跡ユニット1～5(2)	211
第59回	船橋市西の台遺跡ユニット6	212
第60回	流山市上貝塚貝塚	213
第61回	柏市元割遺跡	214
第62回	流山市桐ヶ谷新田遺跡・野田市本郷遺跡	215
第63回	佐倉市御塚山遺跡第I文化層(1)	216
第64回	佐倉市御塚山遺跡第I文化層(2)	217
第65回	佐倉市御塚山遺跡第7地点第2文化層(1)	218
第66回	佐倉市御塚山遺跡第7地点第2文化層(2)	219
第67回	成田市取香和田戸遺跡第2文化層(1)	220
第68回	成田市取香和田戸遺跡第2文化層(2)	221
第69回	成田市取香和田戸遺跡第2文化層(3)	222
第70回	四街道市池花遺跡第3文化層(1)	223
第71回	四街道市池花遺跡第3文化層(2)	224
第72回	四街道市池花遺跡第3文化層(3)	225
第73回	四街道市御山遺跡第VIII a・第VIII b文化層	226
第74回	印旛郡富里町東内野遺跡上層(1)	227
第75回	印旛郡富里町東内野遺跡上層(2)	228
第76回	印旛郡富里町南大溜袋遺跡・八街市朝陽遺跡	229
第77回	印旛郡印旛村平賀一ノ台遺跡(1)	230

第78図	印旛郡印旛村平賀一ノ台遺跡(2)	231
第79図	印旛郡印旛村平賀一ノ台遺跡(3)	232
第80図	印旛郡印旛村平賀一ノ台遺跡(4)・佐倉市向原遺跡第4地点	233
第81図	印旛郡本埜村角田台遺跡(1)	234
第82図	印旛郡本埜村角田台遺跡(2)	235
第83図	印西市木苺峠遺跡第6・9・10ユニット	236
第84図	印西市木苺峠遺跡第18ユニット	237
第85図	印西市木苺峠遺跡第23ユニット・佐倉市大林遺跡第II b文化層	238
第86図	白井市復山谷遺跡WIII直上ブロック・WIII 3ブロック(1)	239
第87図	白井市復山谷遺跡WIII 3ブロック(2)	240
第88図	白井市復山谷遺跡WIII 3ブロック(3)・EIII 1ブロック	241
第89図	香取郡多古町一畝田甚兵衛山南遺跡	242
第90図	香取郡千潟町道木内遺跡	243
第91図	銚子市三崎三丁目遺跡	244
第92図	山武郡大網白里町大網山田台No.1地点(1)	245
第93図	山武郡大網白里町大網山田台No.1地点(2)	246
第94図	富津市前三舟台遺跡	247
第95図	袖ヶ浦市百々目木B遺跡(1)	248
第96図	袖ヶ浦市百々目木B遺跡(2)	249

表目次

1-2 尖頭器石器群の分布と構造

第1表	石器集中地点(300点以上)計測表	28
第2表	遺跡別の礫点数	28
第3表	礫群(200点以上)計測表	28

1-3 尖頭器石器群の編年

第4表	編年表	47
-----	-----	----

2 尖頭器石器群の石材消費戦略

第5表	尖頭器石器群Bの石材組成	58
第6表	尖頭器石器群C・Dの石材組成	59
第7表	尖頭器石器群Eの石材組成	60

3 自然科学的手法による分析

第8表	原産地黒曜石の蛍光X線分析	80
第9表	遺跡出土黒曜石の蛍光X線分析	83
第10表	房総半島出土尖頭器石器群の黒曜石原産地推定結果(1)	86

第11表	房総半島出土尖頭器石器群の黒曜石原産地推定結果（2）	86
第12表	房総半島出土尖頭器石器群の黒曜石原産地推定結果（3）	86
第13表	房総半島出土尖頭器石器群の黒曜石原産地推定結果（4）	87
第14表	房総半島出土尖頭器石器群の黒曜石原産地推定結果（5）	88
附一 1 尖頭器出土遺跡分布地図・地名表		
第15表	尖頭器出土遺跡地名表	111
第16表	尖頭器出土遺跡石器属性表	120

図版目次

図版 1	黒曜石原産地推定分析資料（1）
図版 2	黒曜石原産地推定分析資料（2）
図版 3	黒曜石原産地推定分析資料（3）
図版 4	黒曜石原産地推定分析資料（4）
図版 5	黒曜石原産地推定分析資料（5）
図版 6	黒曜石原産地推定分析資料（6）
図版 7	黒曜石原産地推定分析資料（7）
図版 8	黒曜石原産地推定分析資料（8）
図版 9	黒曜石原産地推定分析資料（9）
図版10	尖頭器石器群各種石材（1）
図版11	尖頭器石器群各種石材（2）
図版12	尖頭器石器群各種石材（3）

尖頭器石器群の研究

— 各時代における諸問題 1 —

はじめに

資料部長 齋木 勝

財団法人千葉県文化財センターは、昭和49年に創立以来、埋蔵文化財の発掘調査及びこれに関連する研究事業・普及事業を主要な業務としている。また、一定の主題を掲げた上で共同研究を実施しており、その成果は『千葉県文化財センター研究紀要』として逐次刊行してきたところである。

『研究紀要』は、文字どおり当センター職員の日頃の研究成果を社会に提示するものであり、昭和51年に第1号を刊行して以来号を重ね、本書で22号を数えるに至った。この間、昭和61年3月に創立10周年記念論集（第10号）を、平成7年1月に創立20周年記念論集（第16号）を刊行した以外は特定の主題によるシリーズとして刊行している。

今号（第22号）から第5期として、「各時代における諸問題」という新しい主題による研究成果の刊行を開始する。当センターでは、創設以来、緊急調査と学術調査によって数多くの遺跡を発掘調査し、刊行してきた調査報告書も400冊に達した。この間、調査を通じて、膨大な資料が集積され、これらの資料の整理・検討と問題点の解明をしてきた。そこで、各時代・各分野における文化、遺跡、遺構、遺物等の問題点を抽出し、これの解決に向けた文献、遺跡などの資料の収集及び整理、そして論考を加えるための共同研究を平成10年度から開始した。

房総半島では、旧石器時代遺跡に対する本格的な調査研究が開始されてから30年余りが経過した。その間、発掘調査件数の増大と調査方法の整備を経て膨大な資料が蓄積され、多岐にわたる問題点と課題も浮き彫りとなってきたが、研究紀要では旧石器時代に関係する主題による研究を昭和50年度以来行ってこなかった。そこで、今号では旧石器時代に関係する問題点を取り上げることとした。

現在、旧石器時代研究における重大なテーマのひとつに、旧石器時代から縄文時代にかけての変革期をどのように理解するか、ということが挙げられる。この大きな問題の解明に近づくため、今回は、旧石器時代後半から縄文時代草創期にかけて展開する尖頭器石器群に焦点をあて、その構造的特質を理解することを目的として研究を行った。

従来、この分野は、印旛郡富里町東内野遺跡に代表される特異な形態の尖頭器ばかりが注目されたためか、それ以外の各種石器群の様相や個々の石器群の位置付けについては深く追求されず、現在に至っても地域編年の構築といった研究は周辺地域に比べ著しく遅れている。その一方で、当地域には多種多様な尖頭器が数多く出土しており、東日本に分布する尖頭器の全ての型式がみられると言っても過言ではない状況である。従って、当地域におけるこれらの資料を整備し、その実態を明らかにすることは、東日本全体の尖頭器石器群を理解する上で重要な鍵となる。

以上の問題と研究目的に対して、資料集成の基礎作業をした上で、尖頭器の型式論・技術論的研究、遺跡の構造論的研究、編年研究、石器石材の研究を行った。特に、石器石材の研究では、自然科学的手法を用いての原産地推定を実施し、房総半島出土資料の由来と当時の人々の行動形態を明らかにしようと試みたものである。

本書は、平成10年度から平成12年度までの3か年を費やした共同研究として実施してきた成果をまとめたもので、今後の旧石器時代研究に寄与することがあれば幸いである。本書の執筆分担は以下のとおりである。なお、本書の編集に当たっては資料部資料課渡邊智信が行った。

最後に、共同研究から本編をまとめるまでの間において、関係各位からは多大なる御指導、御協力をいただいた。ここに御芳名を録し、深く感謝の意を表するものである。

<分析研究及び共同執筆>

二宮修治氏 自然科学的手法による分析 ー蛍光X線による房総半島出土尖頭器石器群の黒曜石原産地推定ー (第3章)

<協力機関>

蟹田町教育委員会、印旛村教育委員会、木更津市教育委員会、木更津市立金鈴塚遺物保存館、(財)君津郡市文化財センター、(財)山武郡市文化財センター、袖ヶ浦市郷土博物館、茅野市八ヶ岳総合博物館、千葉市教育委員会、(財)千葉市文化財調査協会、(財)東総文化財センター、富里町教育委員会、長門町原始・古代ロマン体験館、流山市立博物館、富津市教育委員会、船橋市郷土資料館、八千代市教育委員会、八千代市立郷土博物館(八千代市歴史民俗資料館)、和田村黒曜石石器資料館、青森県立郷土館、(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター、千葉県立房総風土記の丘、東京学芸大学、明治大学考古学博物館

<協力者> (五十音順、敬称略)

青沼道文、朝比奈竹男、安蒜政雄、井口 崇、稲葉理恵、大竹幸恵、金子佐知子、桐村修司、篠原 正、島田和高、鈴木克彦、多田信子、寺門義範、戸倉茂行、永沼律朗、能勢幸枝、藤野次史、増崎恵美子、三浦一範、道上 文、道澤 明、築瀬裕一、矢本節朗、横田正美、吉田直哉

<担当者>

平成10年度 田村 隆、島立 桂、落合章雄
平成11年度 田村 隆、島立 桂、落合章雄
平成12年度 島立 桂、落合章雄、永塚俊司
平成13年度 島立 桂

<執筆分担>

田村 隆 第2章
島立 桂 序章・第3章・第4章
落合章雄 第1章第1・3節
永塚俊司 第1章第2・3節

序 章

島立 桂

第1節 はじめに

房総半島では、過去30年に及ぶ旧石器時代遺跡の発掘調査によって、尖頭器石器群に関連する膨大な資料が蓄積され、調査報告書によって随時公表されてきたところである。しかし、当該石器群に対する研究の現状を見ると、多種多様な石器群を共通の視点で整理し、まとめた論考は極めて少なく、それぞれの系統性や編年の位置付けなどに対する検討は十分なものとはなっていない。

石器群の系統性と編年の位置付けが進展を見せていない理由としては、大きく二つのことが考えられる。

まず、第一の理由としては、石器包含層の堆積状況によるところが大きい。本地域では、当該石器群を包含する立川ローム層の堆積層が薄いため、石器群の編年作業を進める上で極めて有効な、層位的上下関係による新旧関係の決定は困難である。従って、石器群を型式分類した後、層位的に恵まれた相模野・武蔵野両台地の研究成果を準用し、編年作業が試みられてきた。これによって、大局的な石器群の流れは把握されたわけであるが、房総半島と相模野・武蔵野両台地の尖頭器石器群を比較すると、細部ではかなりの相違点が認められ、対比を行う際に齟齬をきたしている。例えば、房総半島におけるナイフ形石器群の後半期から終末期にかけての石器群を見ると、多量の東内野型尖頭器に石刃素材のナイフ形石器や多量の搔器、彫器などの伴うことが知られている。また、土器出現期には「本ノ木型」と呼ばれる極めて細身の尖頭器が顕著である。これらの石器群は相模野・武蔵野両台地では出土例が少なく、編年の位置を細かく定めることはできない。反面、両台地で主体的な「砂川期石器群」は、本地域では散発的にしか見られない。以上のように、両台地で組織した編年を用いて、本地域における尖頭器石器群の変遷を説明することは、困難なのである。

第二の理由としては、石器石材と石器群の多様性との関連があげられる。本地域では、遺跡数の多い房総半島の北部を中心にして、長く「石無し県」と呼ばれてきたことから伺える通り、良質な石器石材が産出しない地域であり、主体的な石器石材は遠隔地域に求められてきた。在地に安定した石材供給源がないと、同一集団ではあっても石材消費活動の際（石器製作作業→遺跡形成）の石材保有状況によって、石器群の様相はかなり異なることが想定される。本地域の石器群に用いられている石材には、信州産や栃木県高原山産の黒曜石、東北産の頁岩、東・北関東産の安山岩、流紋岩、頁岩、玉髓、房総半島嶺岡産の頁岩、上総丘陵砂礫層中のチャート、ホルンフェルス、安山岩などがあり、それらが単独で、あるいは幾つかが組み合わせられて石器群が構成されている。この石材種の保有状況は、当時の人々の行動形態に直接関連すると考えられる。また、石材の搬入形態も角礫や円礫など、ほとんど手の加えられていない原石から、分割礫、大型剥片、石刃、半製品に至るまで多様である。石材種とその搬入形態（素材）は、同一集団によっても必ずしも均質化、画一化が図られているわけではないようであり、その保有状況に応じて多様な、編年の異なるような石器群が形成されることになる。さらに、石器石材の欠乏を補う石器の再生（Reduction＝リダクション）の問題が重なり、多様な石器群が形成されることになる。こうした諸条件と問題点は、石器群を正當に評価し、編成することを困難にしていると考えられる。

ところが、以上の議論を踏まえても、なおかつ房総半島の尖頭器石器群は多様性に富み、東日本に分布する全ての尖頭器型式を含むといっても過言ではない。限定された地域に様々な石器群が交錯して展開しているわけである。この複雑な状況を整理し、編成することによって、はじめて東日本における当該期の動態を説明することが可能と考える。

この現状を認識する一方で、①本地域の出土資料を集成し、基礎資料を作成する、②地域編年を構築する、③今後の方向性を明らかにする、という原則に立ち返り、本研究を企画した。

本書は、本文編と資料編の二部構成である。本文編では、はじめに房総半島における当該期石器群の研究史を振り返り、これまでの研究成果と追求すべき問題点と課題を抽出することに努めた。次いで、第1章では、尖頭器石器群の技術形態学的研究と遺跡の構造論的研究を基礎として、房総半島における当該期石器群の特質と地域編年の構築を目指した。第2章では、技術形態学的に分類した石器群と石器石材との関連を基礎資料として、当時の人々の石器石材採取活動や行動形態への理解を示した。第3章では、東京学芸大学二宮修治氏と共同で、蛍光X線分析を用いて房総半島に分布する黒曜石製尖頭器の原産地推定を行った。第4章では、上記の諸研究をまとめた。資料編は、房総半島における尖頭器石器群の基礎資料として、遺跡一覧とそれぞれの石器構成、遺跡分布図、尖頭器関連文献目録、主要石材の写真を掲載した。

なお、本書の作成に当たっては、多くの方々に御協力を頂いた。その概略を記して感謝の意を表したい。

まず、県外資料に関しては、青森県大平山元遺跡群を青森県立郷土館の鈴木克彦氏、蟹田町教育委員会の三浦一範氏に、岩手県峠山牧場I遺跡、同耳取遺跡を財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターの金子佐知子氏に、長野県鷹山遺跡群、同追分遺跡を長門町原始・古代ロマン体験館の大竹幸恵氏にそれぞれ御教示を頂いた。

次に県内資料に関しては、千葉市南河原坂第3遺跡を千葉市教育委員会の寺門義範氏、明治大学の安蒜政雄氏・島田和高氏に、銚子市三崎三丁目遺跡を財団法人東総文化財センターの横山 仁氏・道澤 明氏にそれぞれ御教示を頂いた。

黒曜石資料の分析に関しては、東京学芸大学の二宮修治氏に多大な御協力を頂いた。また、分析資料の選定と出土資料の内容に関しては、千葉市赤坂遺跡、上鹿子遺跡、中鹿子第2遺跡を千葉市教育委員会の寺門義範氏、財団法人千葉市文化財調査協会の青沼道文氏・横田正美氏・築瀬裕一氏に、八千代市権現後遺跡を八千代市歴史民俗資料館の朝比奈竹男氏に、船橋市西の台遺跡を船橋市郷土資料館の道上 文氏に、流山市桐ヶ谷新田遺跡を流山市立博物館の増崎恵美子氏に、印旛郡富里町東内野遺跡を富里町教育委員会の篠原 正氏に、印旛郡印旛村平賀一ノ台遺跡を印旛村教育委員会の能勢幸恵氏に、山武郡大網白里町大網山田台No.1地点、同砂田中台遺跡を財団法人山武郡市文化財センターの大野康男氏・吉田直哉氏に、木更津市マミヤク遺跡を木更津市教育委員会の戸倉茂行氏に、富津市前三舟台遺跡を富津市教育委員会の桐村修司氏に、袖ヶ浦市尾畑台遺跡、同上大城遺跡、同境No.2遺跡、同筑田遺跡、同中六遺跡、同鼻欠遺跡、同二又堀遺跡、同美生遺跡群、同百々目木B遺跡を袖ヶ浦市郷土博物館の井口 崇氏・多田信子氏、財団法人君津郡市文化財センターの永沼律朗氏・稲葉理恵氏に、四街道市池花遺跡、印西市木苜峠遺跡、白井市復山谷遺跡、同白井第1遺跡を千葉県立房総風土記の丘の矢本節朗氏にそれぞれ御教示を頂いた。

尖頭器石器群の文献目録作成に関しては、広島大学文学部藤野次史氏に御教示を頂いた。

第2節 房総半島における尖頭器石器群の研究史

はじめに

房総半島における尖頭器石器群の研究は、1970年代の初めから半ばにかけて実施された印西市木苺峠遺跡、印旛郡富里町南大溜袋遺跡、同東内野遺跡などの発掘調査と良好な出土資料の研究によって、本格的に開始された。その後、現在に至るまでの30年間で出土資料は増加の一途を辿り、房総半島に分布する尖頭器石器群を題材にした論考も提示されるようになってきた。それでは、当該石器群の調査研究によって、どれだけのことがわかり、また、どのような課題や問題点があるのだろうか。

本章では、房総半島における尖頭器石器群の研究史を振り返り、これまでの成果と今後の課題や展望を考えてみたい。

1. 1950・60年代の調査と研究

房総半島では、1950年代に尖頭器石器群が文献に登場する。1960年代になっても、いくつかの文献がみられるが、当時は旧石器時代遺跡の調査研究がまだ本格化する以前で、印旛沼周辺や東葛地区を中心とした地域で採集された資料を細々と紹介するだけであった。具体的には、1958年に刊行された成田山霊光館の『考古資料解説目録』で、佐倉市江原台遺跡と成田市久住荒海遺跡で採集された尖頭器を縄文時代以前の可能性ある資料として紹介したことにはじまる（文献A1958-14）。その後、松戸市子和清水遺跡の大型尖頭器や松戸市陣ヶ前遺跡ほか数遺跡で採集された各種旧石器時代資料、南大溜袋遺跡の細身の尖頭器などの資料紹介が続く（文献A1968-8・15・28）。発掘調査でも船橋市夏見台遺跡、市川市殿台遺跡で尖頭器が出土しているが、いずれも単独出土資料で、石器集中地点（ブロック、ユニット）は検出されていない（文献A1968-8, 1970-8）。こうした資料紹介は、1965年に、それまでの旧石器時代研究の集大成とも言うべき『日本の考古学Ⅰ（先土器時代）』（文献A1965-34）が刊行されて以後は、周辺地域の研究成果を反映して、型式論的、技術論的視点に則った内容となっている。

2. 1970年代の調査と研究

1970年代に入ると、房総半島の北半に大規模開発の波が急激に押し寄せ、緊急調査が続々と実施されることとなった。こうした流れの中で、1954年の市川市丸山遺跡の発掘調査以来、ほとんど実施されなかった旧石器時代遺跡に対する調査研究も本格化し、出土資料は著しい増加をみせた。1970年代前半に発掘調査が行われた尖頭器石器群の主な遺跡は、新東京国際空港予定地内No51・52・55遺跡（文献A1971-16）、千葉ニュータウン予定地内の木苺峠遺跡、石道谷津遺跡、高根北遺跡（文献A1975-31, 1976-36）が挙げられる。また、柏市鴻ノ巣遺跡や八千代市村上込の内遺跡でも尖頭器石器群が出土している（文献A1974-12, 1975-32）。特に木苺峠遺跡は、広大な面積の発掘調査によって数多くの石器集中地点（ユニット）が層位的上下関係をもって検出され、旧石器時代石器群の編年的研究や遺跡の構造論的研究（集落研究）を行なう上で貴重な資料が得られた。また、鈴木道之助は、同遺跡からまとまって出土した「有樋尖頭器」が関東・中部地方を中心に広く分布することから、「木苺型グレイバー状石器」と仮称して注意を促した。有樋尖頭器自体は、岩宿遺跡発見の契機となり、その後も、松沢亜生が石器製作工程の復元的研究を行う題材とするなど、古くから注目されてきた石器である（文献A1956-5, 1959-2）。また、1960年代には、

長野県渋川遺跡や男女倉遺跡群など黒曜石原産地に立地する諸遺跡の調査を通して、有樋尖頭器の類例も数多く出土していたが、いずれの報告・研究においても、形態的特徴の記述に留まっており、空間的広がりや時間的限定を与えるような型式論的視点を向けるような問題提起は、ほとんど行なわれなかった（文献A1962-15, 1964-21, 1972-16）。本地域にあっても、早く八街市朝陽遺跡からまとまった資料が採取されていたが、詳細は検討されなかった（文献A1980-2）。従って、鈴木は、木苺峠遺跡の出土資料を起点として、有樋尖頭器に対する独自の型式論的理解を示したことになる。ところが、木苺峠遺跡の報告書が刊行された半年後に、森嶋 稔は、男女倉遺跡群の緊急調査によって出土した有樋尖頭器とその関連資料を技術論的に分析し、機能的側面を加味した上で「男女倉技法」を提唱した（文献A1975-11）。翌年、鈴木は、房総半島における旧石器時代研究の現状と課題を論じる中で木苺峠遺跡出土の有樋尖頭器に触れ、「男女倉型彫器はかつて筆者が木苺型彫器と仮称したもので…」と述べている（文献A1976-10；34頁）。同時に、有樋尖頭器を含む石器群の評価についても、ナイフ形石器群の終末期に石刃技法の崩壊によってポイント状のブランクを各種石器の共通の素材として用いるようになるという、森嶋の提唱を受けた見解を表明している。

木苺峠遺跡と男女倉遺跡群が報告された翌年、両遺跡とは異なる形状の有樋尖頭器が東内野遺跡から多量に出土した。調査を行なった篠原 正と戸田哲也は、森嶋による「男女倉技法」の技術論的研究に高い評価を与えつつも、機能的側面を加味した石器形態の理解には批判的で、「男女倉型ナイフ形石器」については、①ナイフ形石器通有のブランディングがみられないこと、②両面加工のナイフ形石器はないこと、「男女倉型彫器」については、彫器本来の機能を果たす「ネガティブバルブ」と「プラットフォーム」が除去されていることなどから、これらの石器を尖頭器と捉えるべき旨を主張し、「東内野型尖頭器」という新名称を提唱した（文献A1977-30）。これに対して、森嶋は、「男女倉技法」を再論する中で「木苺型グレイバー状石器」と「東内野型尖頭器」に触れ、いずれも「男女倉技法」の範疇で理解した上で、型式的差異を考慮して前者を「男女倉型ナイフ形石器・彫刻器・搔器」、後者を「東内野型ナイフ形石器」と評価した（文献A1978-5）。三宅徹也は、青森県大平山元II遺跡出土の膨大な資料を用いて「大平山元技法」を提唱し、同時に「東内野型尖頭器」という名称を踏襲する（文献A1980-7）。さらに、木苺型の細原型彫刻刀形石器への統合化（文献A1982-15）など、同種の石器に様々な名称が付けられることに象徴されるように、有樋尖頭器の研究は次第に混迷の度を深めていく。

この問題と関連して、村井美子は、立教大学考古学研究会による夷隅川流域の分布調査によって得られた勝浦市荒川・吉田遺跡、大多喜町三又遺跡の有樋尖頭器を紹介し、併せて東日本各地に分布する有樋尖頭器の集成と有樋尖頭器の型式論的、技術論的研究の問題点や編年の位置付けについて整理している。特に、有樋尖頭器研究の問題点として、石器の機能と形態の認識に混同があると指摘している（文献A1978-4）。「東内野型」を中心とする有樋尖頭器の研究は、篠原 正や道澤 明によって継続されるが、1980年代後半になって、急激に動き始めることになる。

1970年代半ばになると、小田静夫や鈴木道之助は、大規模開発に伴って急増した新資料を用いて下総台地における旧石器時代石器群の編年を発表する（文献A1974-1, 1975-2・37, 1976-1・10）。これらの編年は、基本的な視点として、東京都野川遺跡とその後に継続された野川流域諸遺跡の出土資料によって整備された「武蔵野編年」に準拠しており、下総台地の新資料を「武蔵野編年」の枠組みに当てはめたものと言える。鈴木は、尖頭器石器群を、①終末期のナイフ形石器に伴うもの（木苺峠III 3期, III 2期=フ

ェイズII b), ②細石刃石器群に伴うもの(木苧峠III 1期=フェイズIII), ③大型の発達した尖頭器(南大溜袋遺跡, 元山遺跡, 三里塚No22遺跡, 殿台遺跡=フェイズIV)の3群に区分している。

1970年代半ば以降の発掘調査として, 佐倉第三工業団地の建設や八千代市萱田地区の土地区画整理事業に伴う発掘調査がある。これらの発掘調査は, 出土遺物の資料的価値もさることながら, 旧石器時代遺跡に対する調査方法の確立に大きく寄与したことで特筆される。下総台地では, 先述した通り, 1970年代の初めから大規模開発と併行して旧石器時代遺跡に対する調査の組織化が進行し, 1970年代半ばには, 緊急調査の工程に立川ローム層内の調査が組み込まれるようになった。発掘調査は立川ローム層の下底にまで及び, 広大な台地上に一定割合の確認調査が行われ, 石器群の分布の有無が確認された。こうした動向の中で, 佐倉第三工業団地内の星谷津遺跡では, 層位的上下関係をもった石器群が良好な状況で出土し, 同時に, 丹沢火山灰(後の始良・丹沢火山灰=A T)の発見や上下2枚の黒色帯の確認など, 本地域における立川ローム層の層序区分を標準化する契機となった(文献A1978-22)。さらに, 自然科学的手法を用いた各種分析も導入され, 旧石器時代遺跡の調査方法が確立した。八千代市萱田地区でも, 権現後遺跡, 井戸向遺跡, 坊山遺跡などで尖頭器石器群が出土しているが, 佐倉第三工業団地内の向原遺跡と並び, 武蔵野台地における立川ローム層IV層下部から中部に対比される尖頭器出現期の資料が含まれており, 注目される(文献A1984-30, 1987-44, 1989-39)。

1979年には, 神奈川県でナイフ形石器文化終末期を対象としたシンポジウムが開催された。関東地方を中心とした各地のナイフ形石器文化終末期の様相と, これに関連する尖頭器文化の発生や展開について議論された。この中で, 鈴木道之助は下総台地の様相を提示し, 戸田哲也は東内野遺跡についての見解を述べている(文献A1979-51, 1980-59)。また, 白石浩之による「尖頭器石器群研究の現状と展望」では, 下総台地で検出されている尖頭器を, 概ね武蔵野台地のIV層上部からIII層にかけての, ナイフ形石器終末期に位置づけている(文献A1979-53)。

3. 1980年代の調査と研究

1980年代は, 印旛郡印旛村平賀一ノ台遺跡, 船橋市西の台遺跡, 四街道市池花遺跡, 佐倉市御塚山遺跡など, 房総半島のみならず, 関東地方における尖頭器石器群の研究にとって重要な遺跡の発掘調査とその報告が相次いだ(文献A1985-63, 1986-92, 1989-36, 1991-46, 1993-51)。

平賀一ノ台遺跡は1979年から1982年にかけて発掘調査が行われ, ソフトローム層中位を中心とする層準から, 尖頭器石器群が多量に検出された。石器群は, 片面調整で切出形を呈する有樋尖頭器と多量の彫器を特徴とし, 搔器, ナイフ形石器, 石刃などで構成される。尖頭器の形態的特徴は東内野遺跡に類似点も認められるが, 石器石材に東北産の頁岩が多く, 搬入された石刃が目立つ点で異なる。また, 石器と粉々に割れた被熱礫片とが混在するユニットが, 東西140m, 南北30mの帯状の範囲に途切れることなく分布しており, 特異な分布形態が明らかにされた。東内野遺跡や銚子市三崎三丁目遺跡(文献A1992-67, 1994-12・70, 2000-51)でも類似した分布状況が確認されており, 房総半島における有樋尖頭器を特徴とする石器群の中心的な遺跡に一般的なあり方なのかも知れない。平賀一ノ台遺跡の発掘調査を行った道澤

明は, 1983年に下総台地における旧石器時代編年を提示し, 平賀一ノ台遺跡, 東内野遺跡, 佐倉市太田・大篠塚遺跡, 木苧峠遺跡など有樋尖頭器を特徴とする一群をナイフ形石器群の終末期に位置付けた。また, 有樋尖頭器の形態は下総台地独特のものであるが, 石器組成や石材の内容は北日本の様相を示してい

ることから、ナイフ形石器群の終末期になると、物質的、文化的に北との結びつきが強まるとみている(文献A1983-13)。しかし、1988年の論考では、この見解に変化がみられる。尖頭器の出現形態を武蔵野台地Ⅳ層下部に特徴的な角錐状石器に求めた上で、平賀一ノ台遺跡を中心とする左右非対称の有槌尖頭器を角錐状石器から変化したものと捉え、下総台地と武蔵野・相模野台地にそれぞれ分布する、形状の異なる有槌尖頭器(東内野型と男女倉型)を概ね同時期に帰属させ、この違いを地域差と捉えた(文献A1988-21)。

西の台遺跡では、信州産黒曜石製の小型尖頭器と東北産頁岩の中・大型の尖頭器がユニットを違えて出土した。道澤は、形態的に異なる2種類の尖頭器を同時期と捉えた上で、東京都仙川遺跡や長野県男女倉遺跡の影響と、山形県越中山A遺跡の影響とが出会ったものと考えている。

篠原 正は、東内野遺跡の出土資料を用いて有槌尖頭器石器群を技術論的、形態論的に検討した結果、有槌尖頭器から剥離される削片は目的剥片の一つであり、有槌尖頭器は製作過程のある段階で石核として機能すると考えた(文献A1980-2)。これは、先の村井の提言を受け入れたものとも評価される。確かに、削片には一定の企画性があり、その鋭利な縁辺には、しばしば微細な刃こぼれが観察される。また、数例の有槌尖頭器と削片の接合資料をみると、最終的な尖頭器の大きさに比べて格段に大きな削片が接合しており、尖頭器製作の一環としてのみ削片が剥離されたとは考えがたい状況を呈している。削片の企画性と目的性については、大平山元Ⅱ遺跡の報告の中で、「大平山元技法」を提唱した三宅徹也と共通した見解と言える。しかし、それだけでは、削片が細石刃のように意図的に生産された石器であると積極的に評価するわけにはいかない。1950年代末に湧別技法が発見されて以来1970年代に至るまで、それが石器か細石刃核かの議論がなされてきた。また、1970年代前半には、加藤晋平は北海道東部の諸遺跡で出土した各種多面体彫器(現在の峠下型や広郷型細石刃核など)とその削片に対して、細石刃核と細石刃の可能性を指摘したが、こうした事例に似ている(文献A1971-9)。企画的な形状の削片が、石器や石器の素材としての目的をもって生産されたものか、製作過程や刃部の再生、あるいは破損による作り直しなどが複合して副次的に生じたものであるのかは、しばしば議論されてきた困難な問題である。この問題を解く手がかりは、鶴丸俊明による広郷型細石刃核と細石刃の詳細な分析¹や変形論に代表される石器認識に対する転換を待たなければならない。

1970年代から80年代前半にかけての石器研究は、山中一郎や平口哲夫が主張するように²技術形態学を中心に展開しており、小林達雄による石器の実体化過程の仮説もそれを支持していた(文献A1975-6)。一方で、橋本 正などにより機能形態学の視点からの研究も行われていたが、体系化を図る程には研究成果の蓄積がなされていなかった(文献A1975-10)。石器の型式とそれを支える製作技術の分析を第一義的に推し進めることが、石器研究において最も基本的かつ正攻法と信じられていた時代である。そこには、石器が製作されてから廃棄されるまでのライフサイクルと変形論には、まだ思いがめぐらなかつた。後に新たな方向を示した論考としては、1980年代後半の長崎潤一による石斧の研究³や1990年代前半の関口博幸による尖頭器の研究(文献A1992-12)が重要である。

1984年に、田村 隆、橋本勝雄によって、房総半島における旧石器時代研究の集大成とも言うべき『房総考古学ライブラリー1 先土器時代』が刊行された(文献1984-70)。同書では、旧石器時代石器群をⅠ期(ナイフ形石器文化に先行する石器文化)、Ⅱ期(ナイフ形石器文化)、Ⅲ期(ナイフ形石器文化に後続する細石刃、尖頭器等の石器文化)に大別した上で、尖頭器石器群をⅡc期、Ⅲb期、縄文時代草創期

の3時期に位置づけている。尖頭器石器群について注目される点は、東内野遺跡、木苧峠遺跡、平賀一ノ台遺跡、角田台遺跡など多様な有柄尖頭器を全てIIc期に位置づけたこと、細石刃石器群(IIIa期)と縄文時代草創期との間にIIIb期を設定し、これを神子柴-長者久保段階と本ノ木-中林段階に細分した上で、南大溜袋遺跡に代表される細身の尖頭器をIIIb期後半とし、隆線文土器よりも古く位置づけたことである。

IIc期については、石器組成を中心にみると、(1)ナイフ形石器のみから構成される遺跡、(2)小型尖頭器のみから構成される遺跡、(3)両者が共にみられる遺跡、の3者があり、石器群の様相が単純ではないことがわかる。特に(1)には、近年再び注目を浴びている「砂川期」石器群や終末期に対比されるナイフ形石器群などを含むが、層位的根拠がないからとはいえ、これらの石器群を早急に先後関係をもって位置付けることなく課題として残した点は、房総半島と武蔵野・相模野台地との地域的差異を考えていく上で重要であった。

IIIb期については、「本ノ木論争」と関連する様々な問題を含んでいる。「本ノ木論争」は、栗島義明や橋本が詳細な学史的検討を行った通り(文献A1986-7, 1988-20, 1991-10)、芹沢長介と山内清男が新潟県本ノ木遺跡で出土した細身の尖頭器(以下、本ノ木型尖頭器)と縄文の圧痕をもつ土器とが共伴するか否かに端を発し、縄文文化の起源をどのように理解するかという問題にまで発展した大論争である(文献A1957-17, 1960-4)。芹沢は、新潟県中林遺跡の研究報告で有舌尖頭器の編年を提示し、本ノ木型尖頭器を隆線文土器に伴う典型的な有舌尖頭器(小瀬が沢型、柳又型)よりも古く位置づけた(文献A1966-2)。加藤 稔も、山形県弓張平遺跡の報告の中で芹沢の見解を追認したものの(文献A1978-46)、一般には1950年代後半から1960年代前半にかけて行われた山形県日向洞穴や同火箱岩洞穴、新潟県小瀬が沢洞穴、長野県石小屋洞穴などの洞穴遺跡の調査研究以降(文献A1958-6, 1960-12, 1967-17・18・25)、1980年代に至るまで本ノ木型尖頭器と縄文の圧痕をもつ土器の共伴関係を認め、本ノ木遺跡の出土資料を隆線文土器よりも新しく位置づける見解が大勢を占めていた。さらに、白石浩之による神奈川県寺尾遺跡第I文化層の報告は、本ノ木遺跡の出土資料を隆線文土器や爪形文土器よりも新しく位置づける見解に拍車をかけた(文献A1980-17)。長崎県岩下洞穴や同泉福寺洞穴において、細身の尖頭器が押型文土器と共伴したことも、細身の尖頭器(→本ノ木型尖頭器)の位置づけに影響を与えていたように思う(文献A1968-34, 1984-68)。以上のように1980年代半ばまでは、鈴木保彦や白石、栗島の論考にみられる通り(文献A1974-6, 1976-7・8, 1982-2, 1986-7)、本ノ木型尖頭器を尖頭器石器群の中で最も新しく位置づける見解が支配的で、そうした研究動向に逆らった形で南大溜袋遺跡や寺尾遺跡第I文化層の尖頭器を、長野県野尻湖仲町遺跡の層位的出土例と尖頭器の形態的分析によって隆線文土器の直前に位置づけたことは卓見であった⁴。その後、神奈川県月見野遺跡群上野遺跡第1地点、相模野No.149遺跡の報告書が刊行され(文献A1986-76, 1989-57)、稲田孝司、鈴木忠司による石器群の研究や(文献A1986-2, 1988-11)、栗島、大塚達朗を中心とする出現期の土器の研究が活発となり(文献A1988-6, 1989-4, 1990-2・3, 1991-4ほか)、併せて出土層位の検討も広く行われることによって「本ノ木論争」と縄文文化の起源に関する議論が再燃し、情勢は大きく変化する。本ノ木遺跡の出土資料を隆線文土器よりも古く位置づける勢力は急速に大きくなり、白石浩之が寺尾遺跡第I文化層の編年の位置を隆線文土器以前に修正するに及び(文献A1990-6)、現在に至った。ただし、この過程で再燃した「草創期」という概念規定に関しては、岡本東三の強烈的な批判もある(文献A1999-2)。

房総半島では、本ノ木型尖頭器が広く分布しており、出土遺跡数も多いが、その大半は単独出土資料で、

10点を超える資料となると南大溜袋遺跡、元割遺跡、弥三郎第2遺跡、四街道市木戸先遺跡などに限られている。その中でも、最大の出土量を誇る南大溜袋遺跡については調査概要と採集資料の紹介があるだけで、詳細な内容は明らかでない。その意味で資料の充実している弥三郎第2遺跡の報告は重要である。この中で、織笠 昭は、石器研究の視点と方法を豊富な資料を用いて提示している。また、田村と橋本が同遺跡を先土器時代終末期に位置付けたことを批判し、縄文時代草創期説を強調している(文献A1992-53)。確かに、現在までの研究成果によると、本ノ木型尖頭器に土器が伴う可能性は高い。また、田村と橋本が併行関係と捉えた寺尾遺跡第I文化層では土器が出土しているわけであるから、先土器時代、縄文時代草創期という時代区分を採用するならば、南大溜袋遺跡や弥三郎第2遺跡の石器群に対しては、縄文時代草創期と呼ぶべきだったのかも知れない。しかし、それ以上に当時一般的であった本ノ木型尖頭器=本ノ木式土器と共伴=隆線文土器以降という図式を破り、現在では大方の賛同を得る時間的(相対的)位置付けを行なったことは、高く評価しなければならない。なお、検討課題としては、神子柴-長者久保石器群と本ノ木-中林石器群との時間的前後関係と両者の系統関係をどう捉えていくかということであろう。さらに、縄文時代草創期という概念に対しても、近年、谷口康浩が青森県大平山元I遺跡の研究成果から提起した年代観を含めた問題があり、十分な検討が必要である(文献A1999-11)。この問題については、従来広く行なわれてきた石器の型式論、技術論的研究だけでは解決が難しく、佐藤宏之が提示したような機能論、行動形態論的視点による研究が重要な指針を与えるであろう(文献A1992-10)。

隆線文土器とそれに伴う石器群については、千葉ニュータウン内で瀬戸遠蓮遺跡、地国穴台遺跡で出土し(文献A1974-10)、その後、市原市南原遺跡、鎌ヶ谷市林跡遺跡、香取郡多古町一畝田甚兵衛山南遺跡(空港No.12遺跡)などで良好な資料が得られ、鈴木、大塚、田村によって隆線文土器や有舌尖頭器の編年観が提示されている(文献A1979-17, 1980-13, 1982-38, 1986-13)。隆線文土器の編年は、1960年代はじめに小林達雄が長野県荷取洞穴の資料紹介の中で提示して以来(文献A1963-10)、1970年代を通して、佐藤達夫、佐々木洋治、鈴木保彦によって、隆線の太さの変化を中心に行われてきた(文献A1971-5, 1973-4, 1977-3)。その後、1980年代に入り、大塚達朗が文様帯の構成を基礎に置く新たな編年観を提示する一方(文献A1982-1)、神奈川県花見山遺跡をはじめとする良好な資料の増加によって、編年研究も進展をみせた(文献A1977-15, 1995-47)。神奈川県寺尾遺跡第I文化層など隆線文土器に先行すると考えられている土器も、隆線文土器研究が深まる中で、その位置付けが明らかとなってきたわけである。

1980年代後半になると、栗島義明や織笠 昭、榎田 誠は、相模野台地を中心とした尖頭器石器群の研究を発表した(文献A1986-8, 1987-1・2)。また、1988年から1989年にかけては、白石浩之による尖頭器を題材とした単行本の刊行や藤野次史による尖頭器石器群の全国編年(文献A1989-13・109)、東京都、長野県と相次いで開催された尖頭器をテーマとするシンポジウムなど(文献A1989-111・113)、尖頭器石器群の研究が急速に活発化する。中でも、有樋尖頭器が脚光を浴びることになり、堤 隆、川口 潤、伊藤 健によって、詳細な技術論的研究が次々と発表された(文献A1988-5・13, 1989-1・2・12ほか)。有樋尖頭器の研究は、1970年代半ばから後半にかけて活発に議論されたが、石器の形態論、型式論、技術論、機能論など、それぞれの視点で抱える問題が表面化し、一方で、ナイフ形石器の型式学的研究が盛り上がりを見せる中で下火となり、未解決のまま議論から遠ざかっていた。これが、その後10年間で蓄積された新資料と技術論的視点、方法によって、再び舞台の中央に登場することになった。川口は、

男女倉遺跡B地点、東内野遺跡、大平山元II遺跡の3遺跡を分析対象とし、「槿状剥離を有する尖頭器」の詳細な観察から石器製作工程の再構成を試みた。堤も有槿尖頭器を技術論的に分析し、東日本に分布する同種の石器を体系化した。房総半島に関連する内容としては、有槿尖頭器を「男女倉型」と「東内野型」に分類した上で、前者と後者は地域性のみならず時間的にも差異のあるものと認識し、後者は、尖頭器が多出する諏訪間編年段階Ⅷに対比した。伊藤は、「男女倉型ナイフ形石器」と「東内野型尖頭器」を共に「槿状剥離を有する尖頭器」とした上で、前者を第1形態、後者を第2形態と分類し、それぞれの変遷と消長を提示した。また、千葉県出土の第2形態を概ね相模野Ⅴ期に位置づけている。各氏は、有槿尖頭器のまとまって出土した数か所の遺跡を分析対象とし、詳細な技術論的研究を行った点で共通する。その中で東内野遺跡、平賀一ノ台遺跡の資料は、相模野・武蔵野編年との比較資料としてしばしば取り上げられたが、下総台地、あるいは東関東地方における尖頭器石器群全体の中での編年的位置付けは、議論されなかった。

田村 隆は、1989年に佐倉市御塚山遺跡、大林遺跡の調査成果を報告し、併せて小型尖頭器の編年を提示した（文献A1989-36）。報告によると、大林遺跡第9地点では、ソフトローム層中の産出層準の差により、石刃ナイフ（第Ⅲ文化層）→東内野型尖頭器（第Ⅱb文化層）→野辺山型細石核（第Ⅰ文化層）という3枚の文化層を確認している。これに、石刃ナイフ（御塚山遺跡Ⅰb文化層、大林遺跡第Ⅲ文化層）の上位から出土した御塚山遺跡Ⅰa文化層と大林遺跡第Ⅱa文化層を加えて小型尖頭器の編年の基軸とし、Ⅰa期；権現後遺跡第12・14ブロック、井戸向遺跡S-3ブロック、Ⅰb期；井戸向遺跡S-2ブロック、Ⅱa期；平賀一ノ台遺跡、Ⅱb期；木苧峠遺跡、Ⅲ期；西の台遺跡と編年した。同時に、Ⅱa期を相模野Ⅳ期前半、Ⅱb期を相模野Ⅳ期後半に対比し、西の台遺跡については「石槍の大きさ・形態の分化がすすみ、比較的大型の両面打製のものが含まれるなど、ほぼ相模野Ⅴ期に並行する」と捉えている。

1989年の長野県のシンポジウムは、1965年以来の戸沢充則を中心とする尖頭器研究（文献A1965-9）の総決算であり、多種多様な項目に対して研究が発表された⁵。中部高地の黒曜石原産地を中心に、他地域に先んじて発生、発達した尖頭器文化を旧石器時代の中でどのように意義付けていくのか、という視点を背景に議論された。シンポジウムは概ね成功裏に終わったようであるが、その後のコメントで、藤野は、尖頭器文化解明へ向けた基礎的作業として、地域ごとの尖頭器の変遷と地域を越えた尖頭器変遷の大枠を把握することの重要性を訴え、具体的方法として、尖頭器の形態組成、尖頭器の製作技術、石器組成、石材組成、素材の生産・獲得技術、ブロック形成の在り方、遺跡立地の7項目を検討すべきとしている（文献A1991-94）。一方、栗島義明、佐藤宏之は、中部高地における尖頭器の発生と周辺地域への伝播という図式そのものに疑問を呈している（文献A1991-90・95）。

さて、シンポジウムの中で、特に房総半島に関連したものとして、道澤 明は、尖頭器石器群を出現期、発達期、展開期と3大別した上で、さらに発達期を3期に細分し、有槿尖頭器を基軸とした編年を提示している。須藤隆司、堤 隆、伊藤 健をはじめとする多くの研究者は、層位的出土状況と共伴するナイフ形石器の型式から、相模野・武蔵野台地の「男女倉型」有槿尖頭器を「砂川期」に、房総半島を中心に分布する「東内野型」有槿尖頭器をナイフ形石器群の終末期に位置づけているのに対し、道澤は、「東内野型尖頭器」を「砂川期」以前に出現し、ナイフ形石器群の終末期まで継続する、息の長い石器と理解している（文献A1989-79）。

石器石材の研究については、1987年に（財）千葉県文化財センターは、房総半島における旧石器時代の

石器石材をテーマとした『研究紀要』11号を刊行した。この中で田村は、旧石器時代資料の充実している南関東地方の相模野台地、武蔵野台地、下総台地を主な分析対象として、各遺跡の石器群を構成する石器石材の由来を現地踏査と自然科学的な手法を含めて追及し、台地ごとの特性や時代ごとの変化を明らかにした（文献B1987-5）。その後、田村は嶺岡山系における珪質頁岩をはじめ、上総丘陵砂礫層中の安山岩、チャート、ホルンフェルス、瑪瑙、銚子産チャートなど、房総半島各地で採取できる石器石材を確認しているが、その一方で、石器石材の入手方法を「埋め込み戦略」に基礎を置き、旧石器時代人の行動形態について、論を展開している（文献B1992-8・9, 1994-7）。

4. 1990年代の調査と研究

1990年代になると、下総台地に展開する旧石器時代各期の石器群を貫く地域的特質として、石無し県という地理的特殊条件下で生み出された、石器石材の効率的（儉約的）消費を背景に、「リダクション型石器」の存在が強調されるようになる。尖頭器石器群についても同様に、下総台地、特に印旛沼周辺に濃密に分布する「東内野型尖頭器」を「リダクション型石器」の典型として捉える傾向が強くなる。一方、四街道市池花遺跡や同御山遺跡、山武郡大網白里町大網山田台No.1地点、市原市武士遺跡、香取郡干潟町道木内遺跡、千葉市有吉遺跡など重要な資料の報告書も刊行され、尖頭器石器群研究の基準となる資料が出揃った（文献A1991-46, 1994-46・51, 1996-45, 1997-33, 1999-28）。

1992年に、田村は、遺物の分析を通して直接得られる成果から、どのような手続きを経て解釈するかについて、社会生態学を基盤として武蔵野II期石器群を論じる中で、東関東に偏在する東内野型尖頭器に触れている（文献A1992-13）。そこでは、東内野型尖頭器を刃部再生に伴って小型化し変形する石器と捉え、この事例をリダクション戦略（Frison effect）適用の典型とみなしており、さらに他の石器の刃部再生、再利用をも提示した上で、石器群全体がリダクション型に傾斜していると評価している。従って、「東内野型」は様式の問題ではなく機能の問題となり、型式学的対比は振り所を失うという。また、リダクション型石器群成立の背景、すなわち石材の欠乏について、生業、居住サイクルとの関連で考察している。確かに、従来の型式論的視点は、廃棄された最終状態を観察して型式を設定した静的なものであり、それでは「リダクション」に対処することができない。恐らく、リダクションの痕跡は、確認しやすいものから判定の困難なものまで程度の差はあっても、石器の再生手法は基本的に石器に付随していたはずであり、製作当初の形状から変形、廃棄に至るまでの過程を併せもつ型式認識を意識する必要がある。一方で、石材の欠乏とリダクション、東内野型尖頭器との関係について、榊は、石材原産地に隣接する大平山元II遺跡や男女倉遺跡群において有樋尖頭器を多量に製作していることから否定的見解を提示している（文献A2000-3）。石器群は常に生態学的コンテキストにおいて考察されなくてはならない、という基本的視座が欠落していよう。

宇田川浩一は田村の方法論を受け、関東地方各地の有樋尖頭器とこれに関連する石器群の計量化を通して、資源分布の偏りに対する適応は、石器石材の管理と消費のあり方に現われることを示した。特に、下総台地は尖頭器変形戦略を援用して、広範囲の移動を行なったと述べている（文献A1995-2）。

新田浩三は、取香和田戸遺跡（空港No.60遺跡）第2文化層の石器群を報告する中で、「東内野型尖頭器」をめぐる考察を行っている（文献A1994-52）。新田は、①取香和田戸遺跡の東内野型尖頭器と2側縁調整のナイフ形石器が形態的に類似することから、両者が機能的に類縁関係にあったと推定されること、②

東内野型尖頭器から剥離されたと考えられる削片の中に、縁辺に調整加工の及んでいない例があること、③下総台地の石器群には「リダクション型石器」が多いことなどから、東内野型尖頭器の一部にはナイフ形石器の刃部再生によって作られたものがあるのではないかと推定している。接合資料による具体例はないが、新たな石器研究の視点と評価できる。同じようなことは、田村が指摘する通り、平賀一の台遺跡で出土した多量の彫器にも見ることができる。これらの彫器は、彫刻刀面を作出するための打面の形状や石器全体の形状が極めて多様で、視点を変えれば定型的な石器ではなく、単に、刃部の損傷した石刃の縁辺を更新したように見えるものがある。つまり彫器に分類される石器には、定型的な調整加工によって一定の形状に仕上げられた石器と、臨機的な刃部再生の石器が混在している可能性がある。平賀一ノ台遺跡では、この他に、尖頭器の先端部はもちろんのこと、搔器の基部にも槿状剥離が見られるなど、槿状剥離によって刃部を再生することが、石器群全体を貫いている現象である。従来技術形態論的枠組みの中では、刃部再生によって石器形態がナイフ形石器から尖頭器へと変わることなど、考慮していなかったように思う。ここに、分類方法に問題はなかったのかという問いかけが生じた。さらに、新田は有槿尖頭器の編年の位置付けについて、取香和田戸遺跡の資料から、「東内野型尖頭器」は「男女倉型尖頭器」と同時期で部分的に共伴し、遺跡によって多様なあり方をみせる両者の組成の差異は、形態組成差・地域差と捉えるべきとした上で、下総台地で多出する「東内野型尖頭器」を諏訪間編年の段階VI～VIIに対比している。

佐藤宏之は、従来の伝統的な石器研究は、分析結果の解釈と説明・叙述が極めて貧弱であることから、多様な解釈の可能性を追求すべきことを主張する。具体的には、技術的組織、変形論、石材受給関係等の操作概念を用いて、下総台地の後期旧石器時代に対して社会生態学的考察を行っている。この中では、下総台地の石器群を石器石材の僅少さとそれに対する「リダクション戦略」によって説明している。東内野型尖頭器についても同様で、男女倉型尖頭器との違いを一般の型式差ではなく、「リダクション戦略」を背景とした表現の差と見ている。(文献A1995-6)。

近年、田村は木苧峠遺跡出土の石器群を再検討する中で、房総半島における尖頭器石器群の編年の考察を行なっている(文献A2000-6)。市原市武士遺跡、千葉市南河原坂第3遺跡など1遺跡で様相の異なる複数の尖頭器石器群を出土した遺跡の資料と、八千代市萱田地区、四街道市内黒田地区などの遺跡群から出土した良好な資料を基礎として、石器群の出土層位、尖頭器と関連石器群の形態的特徴、石器石材の利用傾向などから石器群の表現形として6つのパターンを抽出し、房総半島の「小型石槍」を4段階に分けて説明している。今後の指針となるであろう。

5. まとめ

以上、房総半島における尖頭器石器群の研究は、1950・60年代；本格的な研究の開始以前、1970年代；発掘調査の進展と資料の蓄積、1980年代；形式論、技術論的研究による追求、1990年代；新たな方法論による研究の転換と推移している。このような動向の中で、東内野型尖頭器と本ノ木型尖頭器が絶えず議論の中心にあったが、特に前者の編年の位置付けは現在に至るまで未確定であり、房総半島の旧石器時代後半期の編年全体に大きな影響を及ぼしている。従来のように、東内野遺跡と南大溜袋遺跡の資料を南関東、特に相模野編年の中に組み込むことが尖頭器石器群の研究に大きく寄与するとは思われない。今後は、房総半島独自の地域編年を確立し、それと南関東や北関東、東北地方との比較を行なっていくという方針の下で、各石器群を検討していかなければならない。

- 注1 鶴丸俊明 1985年「「広郷型細石刃核」論」『論集日本原史』113-138頁, 吉川弘文館
- 2 平口哲夫 1970年「旧石器の型式学と技術に関する諸問題 -F. ボルドの考えを中心にして-」『考古学ジャーナル』第57号, 23-27頁, ニュー・サイエンス社
山中一郎 1979年「技術形態学と機能形態学」『考古学ジャーナル』第167号, 13-15頁, ニュー・サイエンス社
- 3 長崎潤一 1990年「後期旧石器時代前半期の石斧 -形態変化論を視点として-」『先史考古学研究』第3号, 1-33頁, 阿佐ヶ谷先史学研究会
- 4 筆者も, 以前「本ノ木論争」について検討する機会があったが(文献A1988-8), 当時は, 田村, 橋本両氏の業績を正しく評価できず, 反省している。
- 5 1989年の長野県シンポジウムとその後数年にわたる尖頭器研究の動向は, 1965年の『日本の考古学I (先土器時代)』の刊行とその後の方法論的展開に共通する流れを感じる。シンポジウムによるそれまでの尖頭器研究の総括と課題, 反省とを踏まえた成果であると思う。

第1章 尖頭器石器群の分布と時間的推移

第1節 尖頭器石器群の技術形態学的検討

落合章雄

1 尖頭器石器群の形態分類と特徴

尖頭器石器群の技術形態学的検討を行うにあたり、今回使用した尖頭器の基本的な形態分類基準を明確にしておきたい。

石器属性表の分類では、尖頭器をA・B・Cの3形態に分類している。尖頭器Bは槌状剥離を有する尖頭器であり、いわゆる男女倉型もしくは東内野型尖頭器に代表される形態である。尖頭器Cは有舌尖頭器であり、尖頭器B・尖頭器Cに該当しない尖頭器を総括して尖頭器Aとした。大別してこの3分類を基本として資料収集を行ったが、石器群の様相を明らかにするためには各形態共に細分する必要性が生じた。細分に際し、特に尖頭器Aとした形態については、尖頭器の出現期から旧石器時代終末期に及ぶ長期間に認められ、時期的に限定される尖頭器B、尖頭器Cとは、細分された各形態のもつ意味が若干異なることを付記しておく。

各形態の細分を行うにあたり、調整面、調整方法、小型・大型の差を考慮する以前に、尖頭器の形状を明確に表す方法として、完形品を対象に最大長を縦軸、最大幅を横軸としてグラフ化したものと（第1図～第4図上段左）、各尖頭器の最大長を10とした場合の最大幅の位置（基部を基準とする）を縦軸、最大長10に対する最大幅の割合を横軸としグラフ化したもの（同図上段右）を提示した。また計測に使用した石器については、各遺跡毎に外形線のみを集約して表示している。なお最大長・最大幅は、報告書に表記されるものについては報告書の数値を、表記されないものについては実測図からの計測値を用いた。また上段右グラフの最大幅の位置については、全て実測図からおこした数値を使用している。

尖頭器A

尖頭器Aについては、縦横比5:1、最大幅位置5～6をAa型、縦横比5:2、最大幅位置4～6をAb型、縦横比5:2～5:4、最大幅位置2～6をAc型として細分できた。

Aa型尖頭器は印旛郡富里町南大溜袋遺跡（文献A1973-18）出土の尖頭器を典型例とする本ノ木型の尖頭器が該当する。千葉市弥三郎第2遺跡（文献A1992-53）や柏市元割遺跡（文献A1986-43）No.1地点A等の石器群にこのAa型が認められる。縦横比は5:1と極めて細身の尖頭器であり、最大幅も中央部から先端部よりにかけて位置する傾向が認められる。調整はほぼ両面に及び、断面形状は厚みのある凸レンズ状となるものが多い。石器素材について明確に復元することは困難である。石材は安山岩、玄武岩、砂岩が多用され、チャート、粘板岩が客体的に認められる。Aa型尖頭器は本来植刃としての分割及び再加工が指摘される。南大溜袋遺跡の資料についても一個体を分割し、分割面から調整を施し尖頭部を作出しているものが認められるが、同遺跡のグラフの数値は各個体とも最大幅がほぼ2cmに収束しており、分割後さらに小型化した尖頭器の作出を目的としているように感じられる。

Ab型尖頭器は「柳葉形」と呼称される尖頭器が該当する。典型的な例として四街道市木戸先遺跡（文献A1994-31）、船橋市西の台遺跡（第57～59図、文献A1985-63）ユニット6、佐倉市御塚山遺跡（文献

A1989-36) 第2・第3・第4ブロック等の石器群があげられる。さらに今回グラフ化は行っていないが、四街道市池花遺跡(第70~72図, 文献A1991-46) 第3文化層にみられる両面, もしくは片面調整尖頭器の一部にもA b型尖頭器に属するものが認められる。また, 先のA a型尖頭器に共伴し, 南大溜袋遺跡, 弥三郎第2遺跡, 元割遺跡でもこの形態の尖頭器が認められる。原則的に大型剥片を素材として作出されるが, 千葉市南河原坂第3遺跡D地点(第38・39図, 文献A1996-51)の資料からは, 礫素材の加工により作出されたものも認められる。石材は安山岩, 頁岩, チャート, 黒曜石等多種に及ぶ。各個体のほぼ中央部に最大幅を持つものが多く, 基部は先端部同様に尖るが, 池花遺跡の資料のように, 基部側に最大幅の位置が偏る個体は基部が丸みを帯びる傾向が認められる。調整は原則として表裏面の両面に密に施され, 左右対称の整った形状となる資料がほとんどであるが, 数値的にこの形態の範疇には, 流山市桐ヶ谷新田遺跡(第62図, 文献A1979-20, A1992-83)の石器群に代表される, 縦長剥片の周縁のみにブラケティング状の調整を施した, 断面が台形状を呈する一群も含まれることも付記しておく。

A c型尖頭器は「木葉形」を呈する尖頭器である。縦横比が5:2から5:4, 最大幅の位置が2~6の値を示す形態であり, 尖頭器とされる石器のほとんどがこの形態に属するといえる。形状等によりさらに細分が可能な形態であるが, ここではあえてこの形態の細分は行わず, 一括してA c型尖頭器として説明を行いたい。

縦横比以外で着目される点は最大長の相違であり, 特に最大長が4 cm未満となる尖頭器については, 市原市武士遺跡(文献A1996-45) 第7文化層, 西の台遺跡, 東金市大網山田台No.1遺跡(文献A1994-46)でまとまった資料が見られる。また, 印西市木苧峠遺跡(文献A1975-31)においても, 個体数は多くないが同様の資料が認められる。概して剥片素材と考えられるが, 西の台遺跡の黒曜石資料中に, 長野産と思われる透明度の高い扁平礫が数個体みられることから, 礫素材の尖頭器の存在も考えられる。調整部位については腹面は無調整, 基部調整, 周縁調整が混在する。背面は全周から調整が施されるが, 部分的に素材剥片の剥離面を残すものが多い。断面形状はカマボコ状もしくは半凸状となり, 概して基部は丸みを帯びる。石材は黒曜石に限定されることが特徴的である。

八千代市権現後遺跡(第53図, 文献A1984-30) 第3文化層, 八千代市井戸向遺跡(第56図, 文献A1987-44) S3ブロック等出土の尖頭器については形状的にはややいびつな感があるが, 素材剥片の周縁を中心に調整を施したものである。尖頭部の作出も不明瞭となる個体が多い。一瞥すると角錐状石器にも類似するが, 断面形状は高さのある台形状を呈し, 調整も粗くなく細調整が面的に施されていることから, 角錐状石器とは一線を画する形態の尖頭器といえる。石材は黒曜石に限定される。

香取郡下総町原山向遺跡(文献A1990-65), 市原市南原遺跡(第51・52図, 文献A1983-6, A1984-70), 香取郡多古町一畝田甚兵衛山南遺跡(第89図, 文献A1986-13), 富津市前三舟台遺跡(第94図, 文献A1992-38, A1995-70)の出土資料のうちA c型に属する形態の尖頭器は, 表裏面ほぼ全面に調整が施されるが, 尖頭部, 側縁部については細調整の認められるものが少ない。このため作りの粗い, 肥厚な印象を受ける個体が多い。中心部より基部側に最大幅を持ち, 基部は丸みを帯びる個体がほとんどである。石材は安山岩で占められ, 剥片を素材として作出されたものがほとんどであるが, 礫素材の個体も少数含まれると考えられる。

A型に属する尖頭器全般について, 特に小型・大型の呼称は避けたが, これは小型・大型の境界となる数値を具体的に提示できなかったため, この点は今後の課題となろう。松戸市子和清水遺跡(文献A19

74-23) 表採の尖頭器は20cmを越え、大型尖頭器と定義するに値する資料であるが、成田市小泉遺跡(文献A1982-72, A1984-70) 表採資料のほかには類例が認められず、出土例の少ない資料であるため基準とはならない。むしろA c型尖頭器に属する最大長4cm内外の尖頭器群については、尖頭器石器群の編年を考えるにあたり、編年軸の中心となり得る資料となるため、特に「小型尖頭器」として呼称したいと思う。

尖頭器B

種状剥離を有する尖頭器Bについては、左右対称形に近い形態と左右非対称形となる形態に大きく二分される。左右対称形では木苺峠第4ユニットの「木苺峠型グレイバー」と紹介される尖頭器、印旛郡本埜村角田台遺跡(第81・82図, 文献A1984-70)、流山市上貝塚貝塚第1ブロック(第60図, 文献1996-48)、袖ヶ浦市境No.2遺跡(文献A1985-30)、山武郡横芝町北長山野遺跡(文献A1990-21)、成田市取香和田戸遺跡(第67-69図, 文献A1994-52)の石器群があげられる。いわゆる男女倉型の範疇に属する形態としてB a型の有樋尖頭器とした。このタイプは縦横比がおおむね5:2であり、最大幅の位置は5以下となる。木苺峠遺跡出土の有樋尖頭器は肥厚な感があり、前述したA c型に属する小型尖頭器の形状と類似する。先端から施されるファシットは彫器のファシットに近く、先端部付近で収束している。B a型の有樋尖頭器の中でも類例の稀少な形態といえる。使用される石材は黒曜石であり、新たな原産地の発見とその分析基準資料から、今回の分析により栃木県高高山産の黒曜石であることが判明した。関東東部から北部地域の関連が考えられる。角田台遺跡の資料についても下総台地において稀少性の高いことが指摘され、特に頁岩製の資料については青森県蟹田町大平山元II遺跡との関連性が強く窺える。

上記以外のB a型に属する有樋尖頭器については、深見諏訪山遺跡等、相模野台地でも類例が認められるように、中央部付近に最大幅の位置するもの、また最大幅位置が4付近に位置し、基部側にふくらみをもつ尖頭器が認められる。前者は取香和田戸遺跡や百々目木B遺跡の資料に代表されるように、両面調整もしくは腹面基部調整となる。縦長剥片を素材として作出され、また共伴する剥片類についても縦長となるものが認められることから、尖頭器文化の中でも比較的古い段階の石器群として位置づけられる。後者は上貝塚貝塚、境No.2遺跡、印旛郡白井町復山谷遺跡(文献A1982-18)等にみられる「ティアドロップ」形といえる形状となるものである。先端部は鋭く作出され、両面調整、もしくは腹面基部調整であり、素材剥片も横長、縦長の両者が使用される。石材は多種であり、珪質頁岩、黒曜石、チャート、流紋岩、凝灰岩が使用される。

左右非対称形では、印旛郡富里町東内野遺跡(第74・75図, 文献A1977-30, A1984-70, A1984-71)、印旛郡印旛村平賀一ノ台遺跡(第77-80図, 文献A1986-92)、四街道市木戸先遺跡の石器群が典型例となる。種状剥離の存在する左右いずれかの側縁が張り出す形状となる。縦横比は5:2から5:3であり、各遺跡出土資料共通であるが、東内野遺跡の石器群と、平賀一ノ台遺跡、木戸先遺跡の石器群とは最大幅の位置に偏差が認められる。東内野遺跡では最大幅位置はおおむね4-5であり、平賀一ノ台遺跡、木戸先遺跡の一部では5-6の数値となる。つまり東内野遺跡の尖頭器Bは中央部より基部側に最大幅が位置するのに対し、平賀一ノ台遺跡の尖頭器Bは中央部より先端部側に最大幅の位置が偏る傾向が認められる。このためここでは前者をB b型尖頭器、後者をB c型尖頭器とした。木戸先遺跡についてはB b型尖頭器、B c型尖頭器の双方の形態が認められ複合型の石器群となろう。各遺跡とも形態の差は認められるものの石器製作技術についてはほとんど違いは認められず、背面はほぼ全面に調整が施され、腹面は無調整、も

しくは基部調整であり腹面全面に調整が認められる個体はほとんど認められない。ファシットは背面側に面的に施され、数的に右側縁よりも左側縁に施される個体が上回るが、制約的なものは感じられない。大きさは最大値2 cmから6 cmの間に収束され、このことはいずれの遺跡とも共通する特徴といえる。第3図左上のグラフを見ると最大長と最大幅の割合は、平賀一ノ台遺跡にやや分散傾向が認められるものの、5 : 2の直線上に分布することが見て取れる。これは尖頭器の再生に伴う典型的な類例と関連するものであり、遺跡内で再生される尖頭器群の様相を如実に表したものである。使用される石材は、共通して安山岩が見られるほか、東内野遺跡では房総丘陵産出の頁岩、平賀一ノ台遺跡では東北地方または北関東産出と想定される頁岩である。ここで東内野遺跡、平賀一ノ台遺跡と同様に、左右非対称形の尖頭器が出土している三崎三丁目遺跡について目を向けると、三崎三丁目遺跡では左右対称形の有樋尖頭器と左右非対称形有樋尖頭器の両者が出土しているが、左右対称形に使用される石材は黒曜石、珪質頁岩、頁岩、安山岩等であるが左右非対称形は房総丘陵産出の頁岩、メノウといった下総台地近辺で採取可能な石材となっている。平賀一ノ台遺跡では例外的に様相が異なるが、左右非対称形の有樋尖頭器は近傍で入手可能な石材による遺跡内における石器製作という、極めて地域限定的な様相を示している。これに対しBa型尖頭器とした左右対称形尖頭器については黒曜石を基盤とした男女倉型の派生段階で、黒曜石以外のチャート、流紋岩、凝灰岩といった関東地方周辺で産出される石材に転換していった様相が窺える。

尖頭器C

尖頭器Cは有舌尖頭器を一括したものである。縦横比と最大幅位置の偏差によりCa型尖頭器、Cb型尖頭器、Cc型尖頭器の3形態に分類した。

Ca型尖頭器とした縦横比5 : 2, 最大幅位置が2 ~ 3を示すものは二辺の長い二等辺三角形を呈し、先端部は鋭く作出される。最大幅の位置はカエシよりやや先端部に偏り位置するものがほとんどである。断面形状は凸レンズ状である。原則的に押圧剥離による両面加工品であるが、ごくまれに素材剥片の腹面を残すもの(八千代市芝山遺跡等)も認められる。成田市取香和田戸遺跡(文献A1994-52)では欠損品であるため図示はしていないが、まとまった資料が確認されている。市原市南原遺跡(文献A1983-6, A1984-70)、袖ヶ浦市寒沢遺跡(文献A1996-38)出土資料に代表される鋸歯状の側縁部をもつものが数多く見受けられ、小瀬が沢型有舌尖頭器といった北陸地方との関連性が窺われる。取香和田戸遺跡を除くほとんどの資料が単独出土であるため、石器製作の工程を明瞭に窺い知ることはできないが、南原遺跡、寒沢遺跡、袖ヶ浦市二又堀遺跡(文献A1993-37)等の資料から、最大長が異なるもののなかで茎部の長さ、カエシの形状はほぼ同一であるものがみられるため、先端部欠損品を加工して先端部を再生していた可能性も考えられる。石材は安山岩が多用される傾向にあるが、チャート・流紋岩等も見受けられる。

Cb型尖頭器は縦横比5 : 3, 最大幅位置2 ~ 4を示す。香取郡下総町原山向遺跡(文献A1990-65)、香取郡多古町一畝田甚兵衛山南遺跡の資料はほぼこのCb型尖頭器に該当する。C型として分類した形態の尖頭器うち、Ca型尖頭器、Cc型尖頭器の形態では単独出土資料が多いなか、Cb型の有舌尖頭器は石器集中を形成して検出される傾向にあり、また一畝田甚兵衛山南遺跡の資料のように微隆起線文土器を伴う例もみられる。Ca型尖頭器と比較して横幅の比率が増加するため肥厚な感じを受けるが、断面形状はCa型尖頭器と同様薄い作りの凸レンズ状を呈する個体が多い。茎部が概して短いこともCa型尖頭器との相違点といえる。先端部は鋭さにやや欠けるものの、調整は表裏全面に施されており丁寧な造りといえる。石材はほぼ安山岩で占められる。一畝田甚兵衛山南遺跡の出土資料をみると、各個体共に最大長に

ばらつきがあり、最小の個体で3 cm、最大で10 cmを越える個体もみられる。第4図左上のグラフを見ると、最大長3 cm～4 cm、最大幅2 cm内に小型の一群が、最大長4 cm～5 cm、最大幅2 cm～3 cm内に中型の一群が認められるものの、その他の個体は最大長10 cmの範囲内に散漫に分布していることが判る。形状については一定の規則があるが個体毎の大きさについては特に制約が認められない。これに対し原山向遺跡では、最大長は各個体毎に差があるものの最大幅については2 cm付近に留まる。茎部とカエシから先端部までの長さの比は各個体共にほぼ同率であり、あたかも長軸方向に引き伸ばしたような印象を受ける。

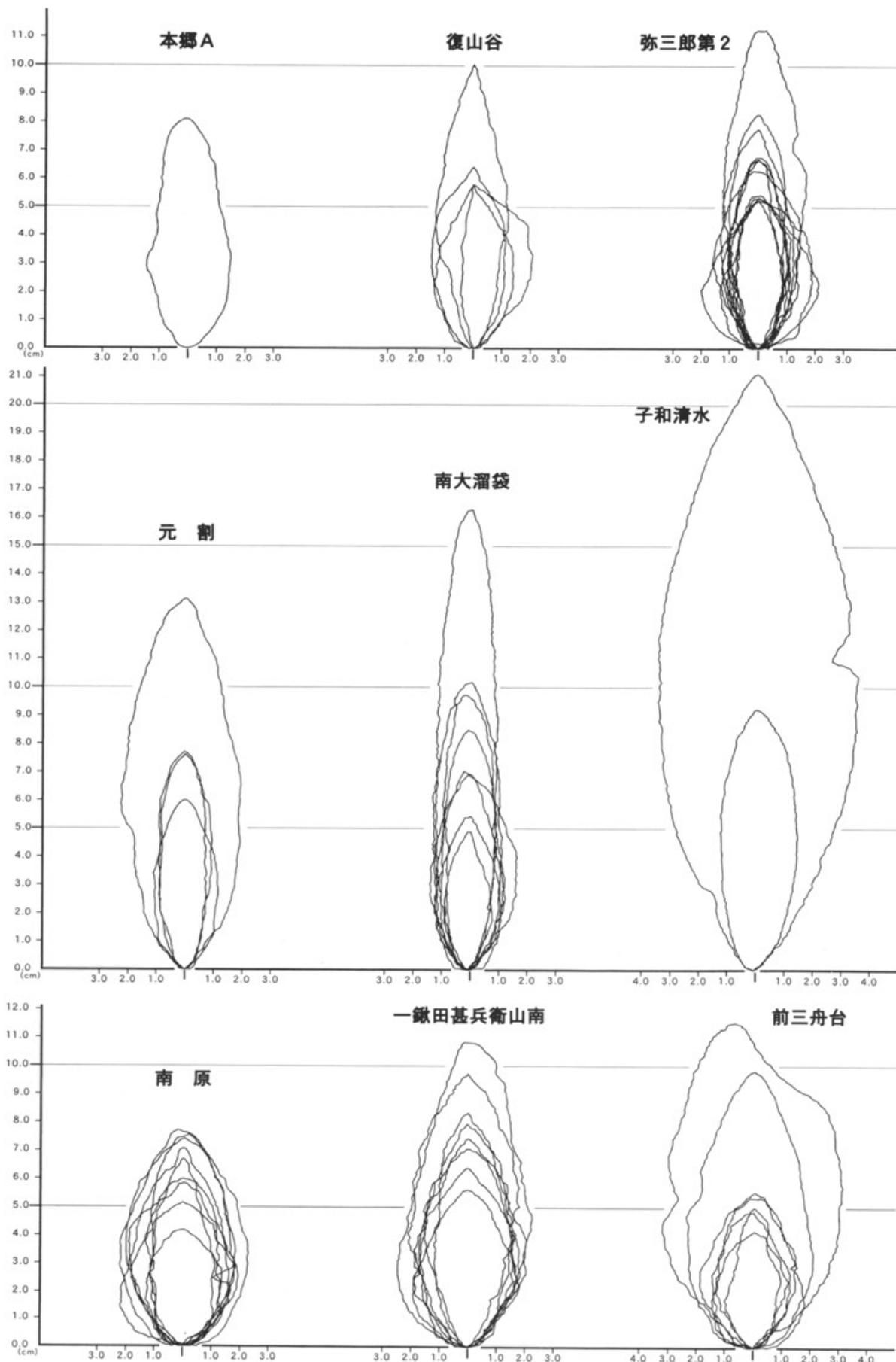
C c型尖頭器は縦横比5 : 3であり、C b型尖頭器と比率的には相違はないが、最大幅の位置が4 付近を示すことから理解できるように、他の形態の有舌尖頭器よりも茎部が長くなる形状である。またカエシが横方向に突出するため、側縁部が先端部からカエシ部分にかけて外に開く、いわば十文字に近い形状となることも大きな特徴となる。図示した資料では千葉市上鹿子遺跡（文献A1992-54）、鎌ヶ谷市五本松遺跡出土のものが該当するが、その他に復山谷遺跡、袖ヶ浦市山王台遺跡でも同様の形態の資料が見受けられる。両面加工品であり断面形状は凸レンズ状で薄い作りであるが、C a型尖頭器・C b型尖頭器と比較すると先端部に鋭さは感じられない。安山岩、玄武岩が多用されるが、復山谷遺跡では稀少性の高い黒曜石製の資料も見受けられる。

2 各形態の共伴関係

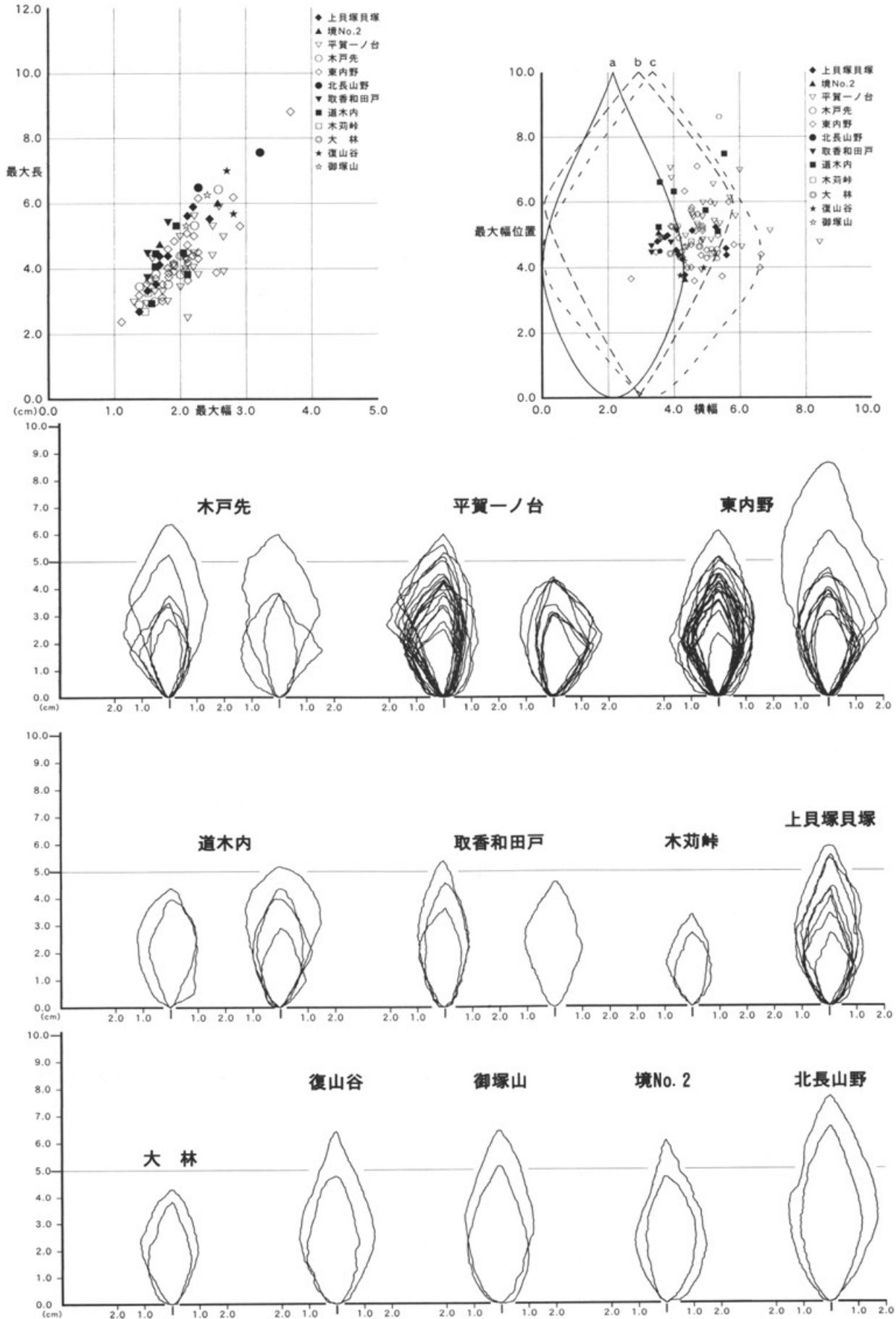
前述したA型、B型、C型の尖頭器について、単独出土資料の多い有舌尖頭器C a型、C c型、または石器群の様相が極めて特徴的な有極尖頭器B b型、B c型については、各形態の単独性が認められる。反面、石器群内で異なる形態の尖頭器が共伴関係にある事例も少なくない。

一鉄田甚兵衛山南遺跡ではA c型尖頭器とC b型尖頭器の共伴関係が明瞭に窺える。使用される石材は両形態共に安山岩であり、剥片素材を用いた個体が圧倒的に多いため、石材の採集から素材剥片の作出までの過程は同一基盤上にあるものと考えられる。A c型木葉形尖頭器の最大長は5.5 cm～11 cmを測り個体毎にまちまちであるが、C b型有舌尖頭器の最大長は3 cm～10 cmの範疇でも特に4 cm～5 cmに集中していることがわかる。大きさの点ではA c型尖頭器の大きさの範疇にC b型尖頭器が全て括られてしまう。調整についてはA c型尖頭器、C b型尖頭器の両者に大きな違いは認められず、各個体の長軸付近に両側縁からの調整剥離が収束しており、断面形状は中央部に最大値が位置する凸レンズ状となる。A c型尖頭器、C b型尖頭器両形態の相違は、素材剥片の段階から製品までの一貫した工程内での各形状なのか、最終形態を意識して素材剥片の調整時点で分岐するものかを考えた場合、仮にA c型尖頭器がプランク的な意味をもつものであれば、さらにA c型尖頭器の基部に、茎部を作出した痕跡の認められる個体が石器群内に含まれていても良く、一鉄田甚兵衛山南遺跡ではこのような資料は確認されていない。よって形態の差異は使用目的等の違いをそのまま意味しているものであり、素材剥片の調整時点で分岐するものと考えられる。一鉄田甚兵衛山南遺跡と同例は、原山向遺跡、南原遺跡が挙げられる。原山向遺跡のA c型尖頭器は安山岩、凝灰岩、流紋岩、頁岩等、C b型尖頭器は安山岩、凝灰岩が使用され若干違いが認められるが、南原遺跡は両形態共に安山岩が使用され、石材についてはA c型、C b型両尖頭器共通である。最大長については、原山向遺跡のA c型尖頭器は4 cm～6 cm、C b型尖頭器は2.7 cm～9 cmと差が大きい5 cm内に収束する個体がほとんどである。南原遺跡のA c型尖頭器は4 cm～8 cm、C b型尖頭器はほぼ4 cm内に収束される。数値的には3遺跡共に同じような様相を示すが、南原遺跡のA c型尖頭器は7 cm～8 cmを測

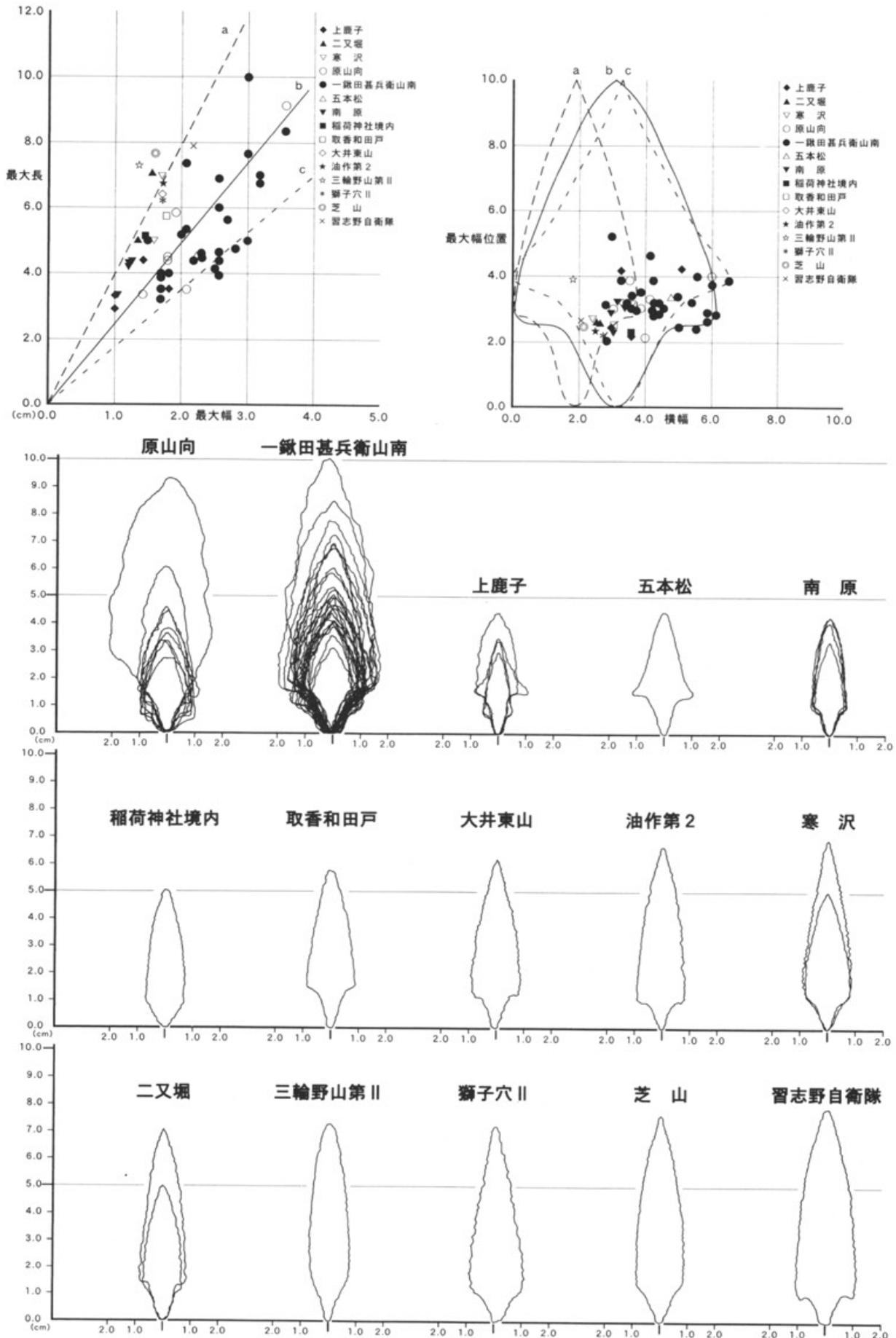
る個体がほとんどであり、同遺跡出土のC b型尖頭器とは隔差が大きいことが指摘される。南原遺跡の両形態については調整剥離にも違いが認められる。A c型尖頭器は粗い調整が施され、断面形状からも肥厚な感を受けるが、C b型尖頭器は押圧剥離により薄い作りとなる。一部に素材剥片の腹面をとどめる個体も見受けられることから、C b型尖頭器の素材剥片は概ね5 cm程と想定され、7 cmを越える素材剥片は使用されていないと考えられる。これは両者の尖頭器の形態の違いが素材剥片の調整時点で分岐する以前の、素材剥片の選択に始まるものとして捉えることが出来る。取香和田戸遺跡第2文化層D地点では、A b型尖頭器とB a型尖頭器の共伴が顕著に認められる。A b型尖頭器の石材は黒曜石、安山岩、チャート、珪質頁岩、流紋岩、泥岩であり多種に及ぶが、B a型尖頭器に使用されるチャート、珪質頁岩は、A b型尖頭器に使用されるチャート、珪質頁岩と同一種と思われる。尖頭器の最大長は両形式に大きな差はなく、ほぼ5 cm～6 cmの範囲に収束され、両面調整、半両面調整の両者がそれぞれの形式で認められる。取香和田戸遺跡D地点は標高35m～41.5mの台地平坦部から緩斜面にかけて調査が行われており、合計22か所の石器集中地点を検出している。地形的要因によるものか、各ブロックが所属する層位の把握は困難であり、第2文化層として括られた各石器集中地点の全てが同時期であるのか、時間差をもつのかについては疑問が残る。A b型尖頭器、B a型尖頭器の両者を共伴する石器集中はD-7ブロックのみであり、他のブロックではそれぞれ各形式の尖頭器が独立存在している。また各ブロック内で尖頭器が製作された痕跡は認められず、ブロックが形成される時点では尖頭器は既に製品化されていた可能性が高い。しかし、D地点内の台地平坦部に位置するブロックのうち、尖頭器を属性に含むブロックでは、同一の技術基盤により作出された縦長剥片を素材としたナイフ形石器が共通的にみられ、これらのブロック間で石器の接合関係が確認されている。B a型尖頭器のD-3ブロックとA b型尖頭器のD-8ブロック、さらにD-8ブロックについては前述したD-7ブロックとの接合関係が認められ、A b型尖頭器とB a型尖頭器の共伴関係が空間をもちながらも窺い知ることができる。



第2図 尖頭器A形態比較図(2)



第3図 尖頭器B形態比較図



第4図 尖頭器C形態比較図

第2節 尖頭器石器群遺跡の分布と構造

永塚俊司

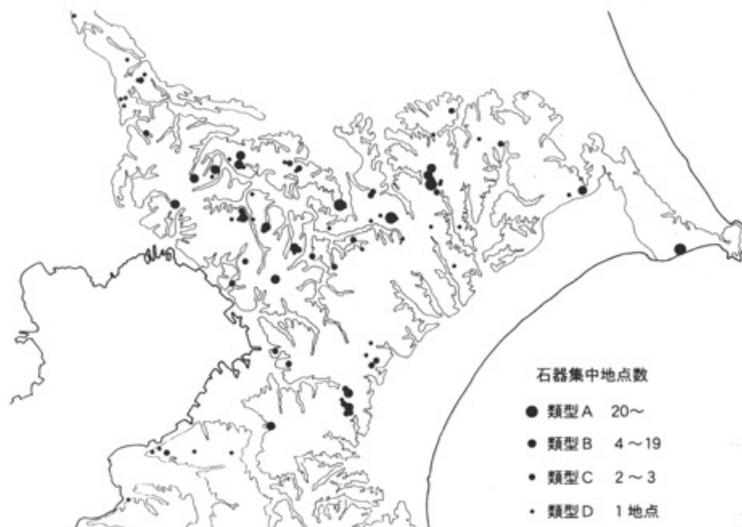
今回の集成によって、千葉県において尖頭器を検出した遺跡は469遺跡となった。ブロック単位ではその数は714を数えるが、その中には単独出土・グリッド一括・表採資料のような、石器集中地点（遺構出土）としては捉えることのできないものを含んでいる。

県内の分水界を基準とした地域区分では、分水界区分Aに223遺跡376ブロック、分水界区分Bに192遺跡273ブロック、分水界区分Cに54遺跡65ブロックが分布し、分水界区分D・分水界区分Eでは尖頭器出土遺跡は現在までのところ明らかとなっていない（第27図）。分水界区分A・B・Cの地域の大半は、浅海堆積層である下総層群を基盤としてその上を関東ローム層に覆われた下総台地にあたり、分水界区分D・Eは房総丘陵南半を占め、そこには硬質な岩石が多産する嶺岡山地が位置している。

後期旧石器時代の遺跡は、利根川・太平洋・東京湾に向かう各水系の流域に広がる平坦な台地を複雑に開析した樹枝状の谷に面した台地の縁辺部に立地していることが従来から指摘され、尖頭器石器群の分布についても全体的にはこの傾向を逸脱するものではないことが理解される。また、このような遺跡立地を反映しているのであろう、帯状を呈する開析をあまり受けていない分水界域における遺跡密度は比較的低いことが判明する。一方で、相対する水系同士が近接するような地域（例えば、分水界区分AとCが接する成田市三里塚周辺にある空港予定地内遺跡群や、分水界区分A・B・Cが隣接する地域に分布する土気南遺跡群・大網山田台遺跡群など）では、濃密な遺跡分布を見ることができる。これとても開発地域の偏在性という呪縛から逃れることはできず断定はできないが、おおむね上記のような傾向を端的に示すものとして理解できるだろう。

石器集中地点を形成する遺跡は、120遺跡が集成され、全体で297の石器集中地点を確認することができた（第5図）。その分布の中心は、下総台地の中央をV字形に大きく開析する鹿島川流域を中心に黒部川・大須賀川・根木名川・手賀沼水系流域といった現利根川に流れる水系が集まる分水界区分Aである。今ひとつは鹿島川と村田川の最上流域に広がる遺跡群を北端として、下総台地と上総丘陵が接する帯状の地域（下総下位面・千葉第一段丘面）に分布域を形成している。一方、分水界区分Bの北半と分水界区分Cでは西の台遺跡や三崎三丁目遺跡等の大規模遺跡が点在するが、遺跡の分布密度は概して低いといえる。

また、下総台地は大きくは4つの段丘面によって構成され¹⁾、各段丘面に分布する遺跡を集計すると下総上位面に296遺跡426ブロック、下総下位面に112遺跡219ブロック、千葉第1段丘面に40遺跡46ブロック、千葉第2段丘面に8遺跡10ブロックが分布する。その他、丘陵部に12遺跡12ブロックが分布する。



第5図 石器集中地点を形成する遺跡分布

第1表 石器集中地点(300点以上)計測表

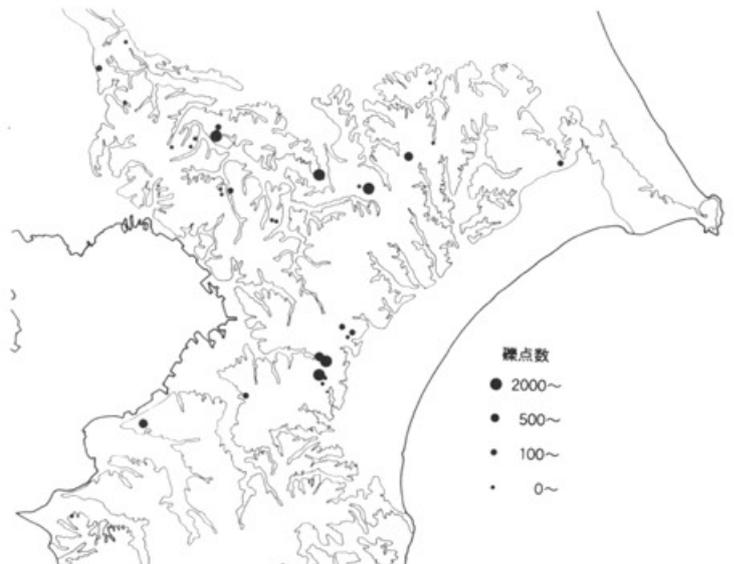
No.	遺跡名	ブロック	長軸 (m)	短軸 (m)	面積 (㎡)	点数	点数/ ㎡
1	木苜峠	第10ユニット	径4m		12	2631	219.25
2	西の台	ユニット1	9.2	7.5	60	2377	39.62
3	大綱山田台No.1		10.9	10.6	95	1991	20.96
4	西の台	ユニット3	9.6	9.4	74	1342	18.14
5	西の台	ユニット6	6.6	5.3	26	1128	43.38
6	百々目木B	第37ブロック	16.8	7.4	103	1018	9.88
7	武士	C6-88	14.4	13.2	138	969	7.02
8	南河原坂3D	第27ブロック	10.8	7.9	70	907	12.96
9	木苜峠	第6ユニット	径4m		12	807	67.25
10	弥三郎第2		11.1	9.2	80	653	8.16
11	南河原坂3H	第II文化層 第27ブロック	5.7	4.3	18	601	33.39
12	南河原坂3D	第17ブロック	10.5	6.8	56	594	10.61
13	南河原坂3B	第17ブロック	6.6	6.1	32	534	16.69
14	池花	III47ブロック	12.6	9.1	91	525	5.77
15	西の台	ユニット2	9.5	8.6	66	511	7.74
16	上貝塚貝塚	第17ブロック	15.0	14.2	150	496	3.31
17	内野第1	ユニット2	4.6	4.6	15	480	32.00
18	一の台	ユニット42	8.2	6.7	39	479	12.28
19	百々目木B	第17ブロック	14.3	9.1	99	472	4.77
20	前三舟台	第17ブロック	4.7	4.4	15	463	30.87
21	西の台	ユニット7	6.4	5.9	24	416	17.33
22	赤坂	第27ブロック	5.7	5.3	23	344	14.96
23	水砂	D7ブロック	12.1	5.4	48	338	7.04
24	内野第1	ユニット1	6.9	5.6	27	338	12.52
25	御山	207ブロック	6.2	5.2	25	323	12.92
26	木苜峠	第9ユニット	径2.5m		5	307	61.40
27	三輪野山第II	第67ブロック	7.3	7.1	36	303	8.42
28	坊山	S-39	16.4	14.7	158	302	1.91

第3表 礫群(200点以上)計測表

No.	遺跡名	ブロック	長軸 (m)	短軸 (m)	面積 (㎡)	点数	点数/ ㎡
1	赤坂	第27ブロック	7.0	6.4	28	1549	55.32
2	赤坂	第37ブロック	5.2	4.4	17	990	58.24
3	一本桜南	247ブロック	6.3	6.1	32	796	24.88
4	一本桜南	237ブロック	10.2	9.1	76	776	10.21
5	一本桜南	227ブロック	8.8	6.5	45	761	16.91
6	一ノ台	ユニット55-56	12.4	5.8	51	463	9.08
7	一ノ台	ユニット10-12	12.6	7.1	73	421	5.77
8	一ノ台	ユニット25-26	11.0	9.8	83	405	4.88
9	南河原坂第2	第27ブロック	10.3	6.2	52	387	7.44
10	一ノ台	ユニット33-35	11.0	10.8	106	371	3.50
11	百々目木B	第37ブロック	16.8	7.4	100	357	3.57
12	一ノ台	ユニット28-29	8.2	4.4	30	333	11.10
13	一ノ台	ユニット31-32	13.6	7.7	83	328	3.95
14	一ノ台	ユニット50-51	10.7	5.5	44	320	7.27
15	一ノ台	ユニット24	16.4	12.8	166	288	1.73
16	一ノ台	ユニット41	8.1	5.7	36	281	7.81
17	一ノ台	ユニット42	10.3	7.9	56	272	4.86
18	一ノ台	ユニット21	10.0	7.7	62	263	4.24
19	一ノ台	ユニット18-19	11.0	10.4	89	261	2.93
20	上貝塚貝塚	第17ブロック				246	
21	一ノ台	ユニット44	8.3	8.3	54	240	4.44
22	一ノ台	ユニット7-8	14.7	10.5	42	237	5.64
23	百々目木B	第27ブロック	8.6	7.5	51	236	4.63
24	一本桜南	257ブロック	6.3	5.0	25	228	9.12
25	一ノ台	ユニット30	9.7	6.0	45	225	5.00
26	一ノ台	ユニット40	11.1	10.5	101	220	2.18
27	大綱山田台No.1		10.9	10.6	92	213	2.32
28	一ノ台	ユニット58	9.2	7.0	50	212	4.24
29	取香和田戸	D-12	9.5	5.7	41	207	5.05

第2表 遺跡別の礫点数

No.	遺跡名	ブロック	点数	類型
1	一ノ台	ユニット1~56	7164	α1・α2
2	赤坂	2~47ブロック	2693	α1
3	一本桜南	22~257ブロック	2561	α1
4	百々目木B	1~37ブロック	629	α1・α2・β
5	南河原坂第2	1・27ブロック	585	α1・β2
6	取香和田戸	8・9・10・12・207ブロック	526	α1・β
7	道木内	1~87ブロック	346	α1・β1・β・θ
8	上貝塚貝塚	第17ブロック	246	β
9	大綱山田台No.1		213	β/α2
10	木苜峠	4・5・6・8・9・13・14・18 ユニット	205	
11	武士	E0-98	181	β
12	大綱山田台No.8	第127ブロック	149	α1
13	村上込の内	210遺構	147	α1
14	中木戸		91	α2
15	武士	C6-88	83	α2
16	天神山	2・4・5ユニット	82	α2・β
17	南河原坂3D	10~127ブロック	55	α1
18	坊山	S-39	47	β
19	中鹿子第2	第17ブロック	45	β
20	前三舟台	第17ブロック	43	α2
21	落山	5・77ブロック	40	α2
22	境外II	1・27ブロック	33	α1・β
23	白幡前	S-22	30	β
24	内野第1	ユニット1-2	27	α2
25	復山谷	EIII27ブロック	24	α2
26	南河原坂3A	3・147ブロック	24	α2・β
27	矢船	第117ブロック	23	β
28	白井第1	0127ブロック	19	β
29	池花	III67ブロック	16	α2
30	御山	20・217ブロック	16	β1・β2
31	南河原坂3H	1・27ブロック	16	α2
32	杉内	第17ブロック	13	α2
33	武士	C8-34	12	α2
34	大綱山田台No.6	第197ブロック	9	β
35	大綱山田台No.8	第117ブロック	9	θ
36	復山谷	C7ブロック	8	β



第6図 礫群を形成する遺跡分布

本節では第15・16表に尖頭器出土遺跡として載せた遺跡のすべてを検討対象とするが、特に石器集中地点を形成する遺跡約120、石器集中地点約300の概要を第1~3表に抽出した。石器集中地点の認定は、大半が報告書の記載に従うが、その内容を把握するのが困難な場合には除外したものがあ

る。まず、石器集中地点は遺物分布の「まとまり」をあくまで視覚的に分離したものであり、ほぼ報告書の記載に準じている。「長軸」は石器集中地点を任意に囲んだ範囲の長軸の長さを示し、長軸に対してほぼ垂直に計測した長さを「短軸」としている。問題となるのは石器集中地点の括り方であるが、集中域から明らかに離れた単体あるいは少数の遺物については範囲外として、あくまで任意にはあるが範囲を決定している。面積についてはその範囲をプランメーターで計測した面積を示している。遺物は剥片石器と礫に分離して、それぞれの点数から1㎡あたりの出土点数を示している。

(1) 石器集中地点の遺物分布

「石器集中地点」は視覚的に分離した遺物分布のまとまりのこととするが、石器製作に関係する剥片石器あるいは製品・破損品等の分布と、礫・破碎礫の分布に大きく分けられる。後者はいわゆる「礫群」と呼ばれている。礫群についてはひとまず置くとして、ここでは尖頭器石器群における石器集中地点の概要について整理し検討したい。

剥片剥離からみた石器集中地点の類型

石器集中地点1カ所から1000点以上の石器が検出されたブロックは、木苧峠遺跡第10ユニット(2631点)、西の台遺跡ユニット1・3・6(2377・1342・1128点)、大綱山田台No.1遺跡(1991点)、百々目木B遺跡第3ブロック(1018点)の4遺跡6地点である(第1表)。いずれも1㎡単位の点数が突出しており、その形態は径約3～4mの円形を呈した範囲に密集する分布状況を示している(第7・8図)。西の台例は、各ブロックとも尖頭器の調整剥片を多量に伴うことから、集中的に行われる尖頭器製作(原石消費)の状況を見ることができる。このようなパイフェイス・リダクションによる原石消費に対して、百々目木B例は嶺岡頁岩を主に用いたコア・リダクションによる原石消費を特徴とする。いわゆる「石刃技法」を主体とする原石消費が優位な石器集中地点である。一方、大綱山田台例は、ブランクあるいは分割礫の状況で搬入された素材を用いた尖頭器製作とともに剥片剥離による臨機的な縦長剥片生産がみられる。

このように多量の剥片石器が検出される石器集中地点を概観すると、その形成過程としては、尖頭器調整剥離作業が優位なもの(西の台例:類型1)と石刃生産あるいは一般的な剥片剥離作業が優位なもの(百々目木B例:類型2)に大きく分けられる。前者はもちろん尖頭器の調整剥片を主体とし、後者はいわゆる剥片と剥片剥離に伴う碎片が主体となる。また、その両者の特徴が併存する遺跡もあり、それらについては類型3(大綱山田台例)とする。このような分類に従って、その他の遺跡についてみてみよう。

類型1には御山遺跡第20ブロック・大林遺跡第10ブロックの黒曜石製有樋尖頭器石器群、西の台遺跡ユニット1～5、砂田中台遺跡第15・16ブロック、南河原坂第3遺跡C地点等に代表される黒曜石製小型尖頭器石器群、西の台遺跡ユニット6・7、池花遺跡Ⅲ3・4・10ブロックなどに代表される東北産珪質頁岩製の尖頭器石器群を特徴的に含み、これらを一括すれば黒曜石・東北産珪質頁岩を主に用いた尖頭器製作において特徴的な類型と言えよう。今ひとつは、弥三郎第2遺跡、南大溜袋遺跡のような多様な石材を用いた細身の尖頭器を特徴的に組成する石器群が本類に属する。

遺物分布は狭い範囲に密集する形態をとるものが大半であるが、その規模は井戸向遺跡S-6ブロック・雷塚遺跡のように少数母岩による小規模な石器集中から、西の台遺跡ユニット1・3・6に見られるような1000点規模の大規模なものまでを含む。

いずれの遺跡においても遺跡内には荒割りした分割礫あるいはブランク段階のものが搬入され、原石段階から始まる初期工程は石材原産地近傍で行われたと考えられる。ちなみに西向野第1遺跡第1ユニットでは、このような搬入形態を示す、黒曜石原石を荒割りした分割礫が検出されている。

礫群を伴う例は少ない。有樋尖頭器を伴う境外II遺跡第2号ブロック・御山遺跡第20・21ブロックで検出されているが、いずれも小規模で構成礫が6点～23点に収まる。その分布は類型2・3では石器集中と重なるものが主体を占めるが、本類型のものは若干ズレるという特徴を持つ(類型β)。

一方で、本類型には非黒曜石製の有樋尖頭器石器群は少なく、先に挙げた境外II遺跡以外では、上貝塚貝塚第1ブロックがあるが、上貝塚例は小ブロックが狭い範囲に点在する分布状況を呈しており、このよ

うな例はあまり見あたらずやや特異な存在である。しかしながら、これら小ブロックが少数母岩で占められる特徴や、礫群と石器集中地点との分布が重ならないことは本類型の特徴を示している。

類型2は基本的に少数の尖頭器完成品が搬入され、尖頭器が客体的な存在であり、遺跡内で尖頭器の調整剥離・修正剥離等を頻繁に行わない若しくは行っても極僅かの石器集中地点を一括した。尖頭器製作以外の素材剥片を目的とした剥片剥離に伴う石器集中の形成が特徴である。

大きく2つに分かれる。類型2aとして石刃生産を基調とする百々目木B遺跡、落山遺跡5～8ブロック、一本桜南遺跡21ブロック、南河原坂第3遺跡A地点、御塚山遺跡第16ブロック、武士遺跡C6-88地点等が挙げられる。類型2bとして一般的な剥片剥離を基調とする権現後遺跡第14・12ブロック、井戸向遺跡S-1・3・4地点、池向遺跡E地点、南河原坂第3遺跡B地点、復山谷遺跡W区Ⅲ2～4ブロック、御塚山第1～6ブロック、取香和田戸遺跡（空港No.60遺跡）D-8・12・15ブロック等、一ノ台遺跡ユニット2～6、道木内遺跡、前三舟台遺跡、有吉遺跡（第4次）等を挙げることができる。類型2aで百々目木B例には、一部に安山岩を用いた尖頭器製作の初期工程がみられる（第13図）。類型2bはさらにいくつかのグルーピングが可能で、権現後例等を代表とする所謂「Ⅳ下～Ⅴ層段階」の石器群と、剥片ナイフ製作をみる取香和田戸例・一ノ台例の有樋尖頭器石器群と復山谷例・御塚山例の非有樋尖頭器石器群に分かれる。各石器群の編年については本章第3節を参照していただきたいが、本類型にはおおむね尖頭器の発生期から初期の段階のものが特徴的に属する。

遺物分布は類型1に見られるような石器集中地点内に密集域を形成するものは希である。密集域を形成する例は尖頭器製作に見られる特徴的な分布形態とすることなのであろう。

礫群の状況は類型1と異なり、一部に高い保有率を示す。南河原坂3J例・取香和田戸例、百々目木B例・道木内例・一ノ台例などの有樋尖頭器石器群に顕著に伴う。そしてその大半が石器集中の分布と重なる点（類型α）も類型1とは大きく異なる。また、所謂「Ⅳ下～Ⅴ層段階」の石器群には顕著に礫群が構築されることが知られているが、その流れは南河原坂3B例に見ることができる。一方で、これらの遺跡以外では礫群の保有率は極めて低調である。

また注目すべきは、取香和田戸例や一ノ台例で、このような一般的な剥片剥離を主体とする石器集中地点とともに、遺跡内には「再生」剥離を主体とした有樋尖頭器を特徴とする石器集中地点が併存することである。

類型3は類型1と類型2の両者の特徴を合わせ持つものである。木苧峠遺跡、大林遺跡第9ブロック、赤坂遺跡、水砂遺跡Dブロック、南河原坂第3遺跡D・E・G・H地点、大綱山田台No.1遺跡、浅間台遺跡、内野第1遺跡ユニット1・2、杉内遺跡等が本類型に含まれるが、剥片剥離の状況は類型1と類型2においても完全に分離できるものは少なく、あくまで相対的なものであるため、これらの分類についても判断の仕方において流動的である点は否めない。そのため、先の類型1・2のように、その特徴を捕まえるのは非常に困難であるということも言える。

ともかく、本類型の一端を構成する剥片剥離の工程が果たして尖頭器の素材剥片剥離のためのものであるのかは、大きな問題である。確実に断定できる資料は少なく、南河原坂第3遺跡の各地点を代表とする石器集中地点では、活発な剥片剥離が行われ、石核が遺存し、剥片を素材とした周縁加工の小型尖頭器が多量に残されている。一方で大型尖頭器製作の痕跡も見られ、これらについてはブランクや荒割りした素材を持ち込み遺跡内で整形しており、明らかに両者には遺跡内で別工程で石器製作が進行しているものの、

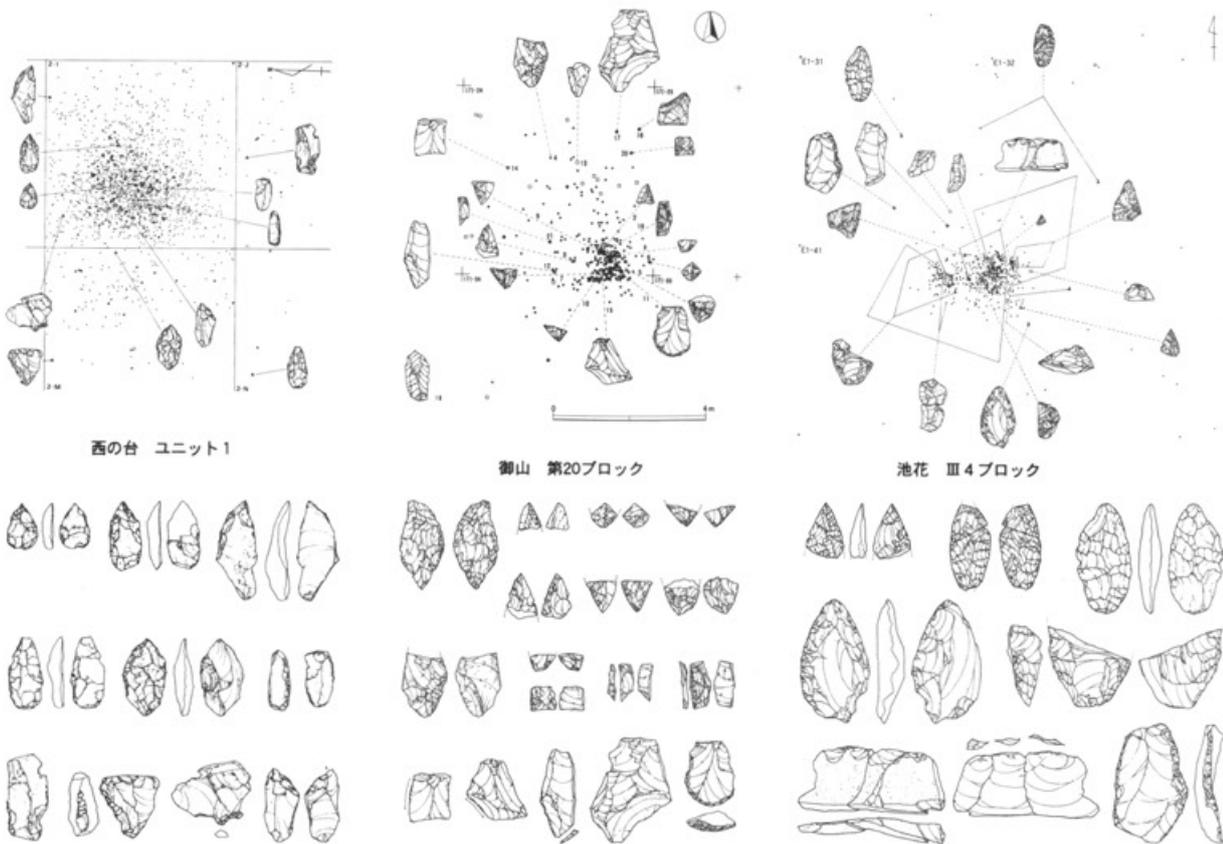
大型尖頭器の調整剥片を用いた周縁調整尖頭器の存在はその両者の密接な関係性を示している。このような例は下総台地においては数少なく、一般的には遺跡内で行われる剥片剥離は尖頭器製作以外の素材剥片生産を目的とし、臨機的に行われたものと理解される。

遺物分布は類型1のように尖頭器調整剥片による密集域が形成されるタイプのもものが多く、大規模礫群と石器集中が重なる赤坂例を除くと礫群を持つ遺跡は少ないが、坊山遺跡・大綱山田台No.1遺跡・武士E0-98地点等では石器集中地点と分布が重ならない、小規模な礫群が検出されている。

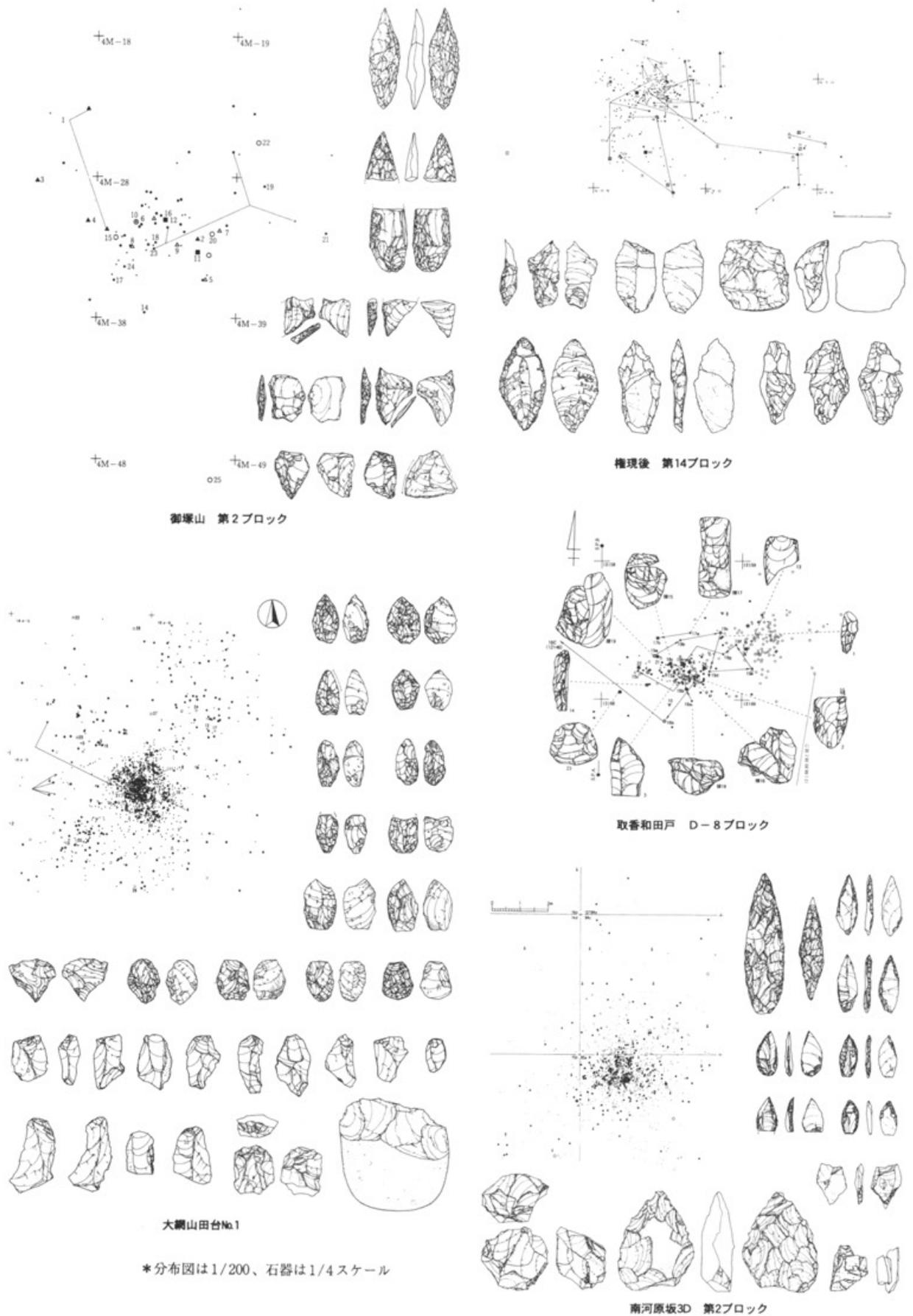
類型4は集中的な尖頭器製作が見られず、かといって剥片剥離による母岩消費が顕著なわけではないものである。一ノ台遺跡7~57ブロックが代表的で、他に一本桜南遺跡や高根北遺跡などが相当しようか。

一ノ台例では、石刃・尖頭器（製品・ブランク・破損品）・各種搔器・削器・彫刻刀形石器等が多量に検出され、一部に石刃・剥片を用いた剥片剥離が見られるものの、尖頭器・彫刻刀形石器・搔・削器類の刃部再生が頻繁に行われた状況が見られる。遺跡への搬入形態は、ある程度目的とする器種が決定した素材（ブランクを含む）を搬入する場合と、目的とする器種にフレキシブルに対応することができる素材をもちこみ、遺跡内で石器製作を行うようである²。後者の場合、削片剥離は石器製作の初期の段階から仕上げの段階まで様々な状況に応じて行われるため、幅広大型のものを特徴的に含み、なかには「稜付き石刃」様に断面三角形状を呈するものもある。また削片が石器として用いられることも従来から指摘されているが（文献A1980-2他）、削片を含む剥片の石核としての機能も切り離すことができない³。

石刃（大型剥片）生産は遺跡内では行われず、石材原産地近傍で行われたものが搬入されている。また、一本桜南例を含めて大規模な礫群が伴い、その分布は石器集中地点と重なる状況を示している（類型α）。



第7図 石器集中地点の類型（1）



第8図 石器集中地点の類型(2)

(2) 石器集中地点と礫群

ここでは礫群の様相を中心に石器集中地点との関係について概観したい。

礫群構成礫は径5cm前後、若しくはそれ以下の礫・破砕礫が主体であるが、径10cm前後以上のものを含む礫群もないわけではない(境外II遺跡等)。具体的な比率はわからないが、多くの礫群が破砕礫・小型扁平円礫によって形成されていることが明らかとなっている。

礫種については、各遺跡で異なる組成比がみられるが、石英斑岩(流紋岩)、チャート、砂岩、安山岩、泥岩が代表的なものとして挙げられる。礫種が明らかとなっている百々目木B・武士・大網山田台No.1・道木内・上貝塚貝塚・一本桜南遺跡における礫種の構成を概観すると、一般的に、下総台地北半では概して流紋岩・安山岩の組成率が高まり、南半ではチャートの組成率が高くなる傾向が見られる。しかしながら、礫・破砕礫については各遺跡において十分な分析が行われていないものが多く、あくまで傾向として指摘しておきたい。

全体的には、一カ所の礫群(あくまで視覚的な分離による)の構成礫の点数は、平均で約150点を数えるが、1~49点のものが76礫群、50~199点のものが32礫群、200~499点のものが24礫群、500点以上の礫で構成される礫群は5礫群である(第3表)。

遺跡単位でみると構成礫が50点以上の礫群がみられる遺跡は僅かに17遺跡に過ぎず、礫群を持つ遺跡と、持たない遺跡は明瞭に分離されることが理解される(第2表)。その中で目立つのはやはり平賀一ノ台遺跡である。濃淡はあるが、遺跡全体に切れ目無く礫が分布している状況が見て取れる。その規模も大きく、100点以上で構成される礫群の半数以上が同遺跡から検出されている。また一ノ台遺跡では礫群の集中部に焼土粒の集中(炉跡)がみられるなど注目すべき状況を示している。

礫群をもつ遺跡の特徴をいくつか挙げよう。まず目立つのは有樋尖頭器石器群である。規模を問わなければ、有樋尖頭器をもつ遺跡の実に9割以上に礫群が伴う。有樋尖頭器石器群以外で礫群と認定できそうなのは大網山田台No.1遺跡、上鹿子遺跡の黒曜石製の小型尖頭器石器群のものがある。出土石器総点数に占める礫点数の割合は有樋尖頭器石器群のものが突出して高く、両者の違いを際立たせている。

単独や少数の石器集中地点によって形成される遺跡においては、礫群を伴わないのが一般的であり、大規模遺跡ほど礫群を保有する比率が高いようであるが、西の台遺跡で7カ所、池花遺跡で10カ所の石器集中地点を検出しながら十分な礫群を形成しない例もみられる。両遺跡は尖頭器の調整剥片を主体とする石器集中地点(類型1-バイフェイス・リダクション主体)で構成され、類型1の礫群保有率の低さについては先に述べたとおりである。

遺跡単位においても、平賀一ノ台遺跡が突出している。その点数は実に7000点もの多量の礫・破砕礫が検出されている。また東内野遺跡でも、本報告が未完であるため詳細はわからないが、第1次調査において、すでに4000点以上の礫・破砕礫を検出している(文献A1977-30)。両遺跡とも多数の石器集中地点を形成し、出土石器総点数の約半数近くを礫が占めるが、少数地点の礫群で多量の「破砕礫」を保有し、礫群構成礫が出土石器の8~9割以上を占める一本桜南遺跡、赤坂遺跡等は特徴的である。両遺跡では、多量の破砕礫の中に剥片石器が混在するような出土状況を見せ、いくつかの点で共通点を指摘できる。a) 礫は径3cm前後の小さな円礫で完形礫よりも破砕礫が主体となる、b) いずれも被熱により赤化している、c) 礫は径2m内外に密集し、各ブロック間には明瞭な無遺物地域が存在する、d) 剥片石器はそのような密集域に混在する状況で検出され、点数的にも圧倒的な客体的存在である(類型 α 1)、e) 石器群の

内容は、幅広の削片（スポール）剥離を特徴とする石器群で、有樋尖頭器・石刃・搔器・彫刻刀形石器などがみられる。石材構成については対照的で、一本桜南例では専ら東北産の珪質頁岩、赤坂例は黒曜石・安山岩・頁岩・凝灰岩・ホルンフェルスなど多様な構成を示し、白滝頁岩や高原山産の黒曜石が特徴である。これらと同様の特徴を持つ礫群は、断片的な情報ながら角田台遺跡が知られ、石器群の内容においても酷似するが、詳細は未報告であるので、その存在を指摘するに止めておきたい。

礫群の形態と石器群

礫群の形態分類には、その分布状況から密集型と分散型に大きく2分されるが、遺跡内に複数の礫群を持つこと自体稀であるため、ここでは遺跡における異なる礫群の検出状況について知ることはあまり重要ではないように思われる。一般的には、多数の礫で構成される礫群は密集した状況で検出され、少数のものは分散するという傾向にあるという点を最初に指摘しておきたい。

今回は、礫群と石器集中地点がどのような分布状況を示し、その点数比がどのような関係にあるのかを検討し、第2表に主要なものを抜粋した。

類型α-1	礫群と石器集中地点の分布が重なり、	点数が礫・破碎礫>剥片石器という関係のもの
-2	〃	礫・破碎礫<剥片石器 〃
類型β-1	礫群と石器集中地点の分布が重ならず、	点数が礫・破碎礫>剥片石器という関係のもの
-2	〃	礫・破碎礫<剥片石器 〃

下総台地に広がる礫群

視点を台地全体に拡大すると、その分布傾向に偏在性が指摘される。

石器集中地点で6点以上の礫を保有する遺跡は利根川水系を中心とする分水界区分Aと上総丘陵に沿った下総台地上の帯状地域に大きく分けられる。前者を礫群分布a、後者を礫群分布bと仮称する。つまり分水界区分Bの北半、分水界区分Cの北半（下総台地部分）地域には礫群を形成する遺跡はほとんど見られない（第6図）。この偏在性の要因の一つは、やはり礫採取地域の限定性にあると思われる。

礫群分布bにはいわゆる万田野礫層が南北に走り、礫採取はこの礫層からなされたと考えるのが妥当であろう。縄文時代以降の同地域に知られる豊富な礫群についても同様であると思われる。一方、礫群分布a周辺には現在までのところ、礫層等の礫採取が可能な地点は知られていない。今後は尖頭器石器群以外で礫群を持つ遺跡の分布を検討する必要があるが、大きくその傾向が変わらなければ、礫群分布aの近隣に現在我々の知ることのできない沖積層に埋没した良好な礫層等の存在を示唆することとなろう。この地域の遺跡で検出される礫種などから、古鬼怒川水系との関連が濃厚とされており（文献B1987-5）、当時の古環境を含めた検討が今後の課題である。

礫群の存在

礫群はA T降灰以降、所謂「IV下～V層段階」に爆発的に増加し、次第に減少していく状況が明らかとなっている。礫群＝調理施設という偏った認識に警鐘を鳴らし、礫群の登場が人類史における一大転換点ととらえる田村氏の視点は重要である（文献A1994-46）。一方で、礫群の存在を取って台地上だけに限定するのではなく、礫を台地の上にある遺跡に搬入し使用したことに注目し、そのような人間行動の変化に重要な意義を見いだすこともできよう。一つの考え方として、「礫採取→台地上の遺跡への搬入」という労力（コスト）に対する「見返り」とは何であったのか。あくまで仮説の域を出ないが、“滞在期間の延長”、“回帰的な遺跡利用”、“扶養可能人数の増加”等を挙げることができようか。

(3) 石器集中地点の規模（遺跡類型）

さてここまで、個別に石器集中地点と礫群について分解して検討してみたが、遺跡内にはそれらがどのように配されているのか、石器集中地点の規模（地点数）に焦点を当ててみよう。

類型A 石器集中地点が途切れることなく広範囲に広がる。20地点以上の石器集中が見られる。

東内野遺跡 平賀一ノ台遺跡 三崎三丁目遺跡 取香和田戸遺跡（空港No60遺跡）

このような大規模遺跡が見られるのは有樋尖頭器石器群に限られる。各遺跡ともその内容については一様ではなく全体を括る大きな共通項はやはり有樋尖頭器に限られるが、一方で原石・石核を持ち込んだ安山岩・嶺岡頁岩を主体的に用いた剥片剥離（剥片ナイフの製作）等の様相を併存している点が特徴である。また、各遺跡には多量の礫が搬入され遺跡内に遺存している。

類型B 石器集中地点が同一遺跡内に複数存在する。4～18地点。

井戸向遺跡 御塚山第7地点 落山遺跡 復山谷遺跡 木苧峠遺跡 上鹿子遺跡 西の台遺跡 池花遺跡
一本桜南遺跡 道木内遺跡 南河原坂3B地点 南河原坂3C地点 南河原坂3D地点 南河原坂3E地点
南河原坂3G地点 十余三稲荷峰東遺跡 等

20遺跡が該当し、時期を含めその内容はバラエティーに富んでいるが、有舌尖頭器を主体とする遺跡、細身・大型の尖頭器を主体とする石器群については同一遺跡内に複数のブロックが検出されることはない。また、有樋尖頭器石器群が比較的目立たないことも指摘できよう。出土点数的には1000点以上で構成されるものと100～500点単位のものが見られる。前者には礫群が伴うものが大半であるが、西の台遺跡のように例外も見られる。

類型C 石器集中地点が同一遺跡内に複数存在する。2～3地点。

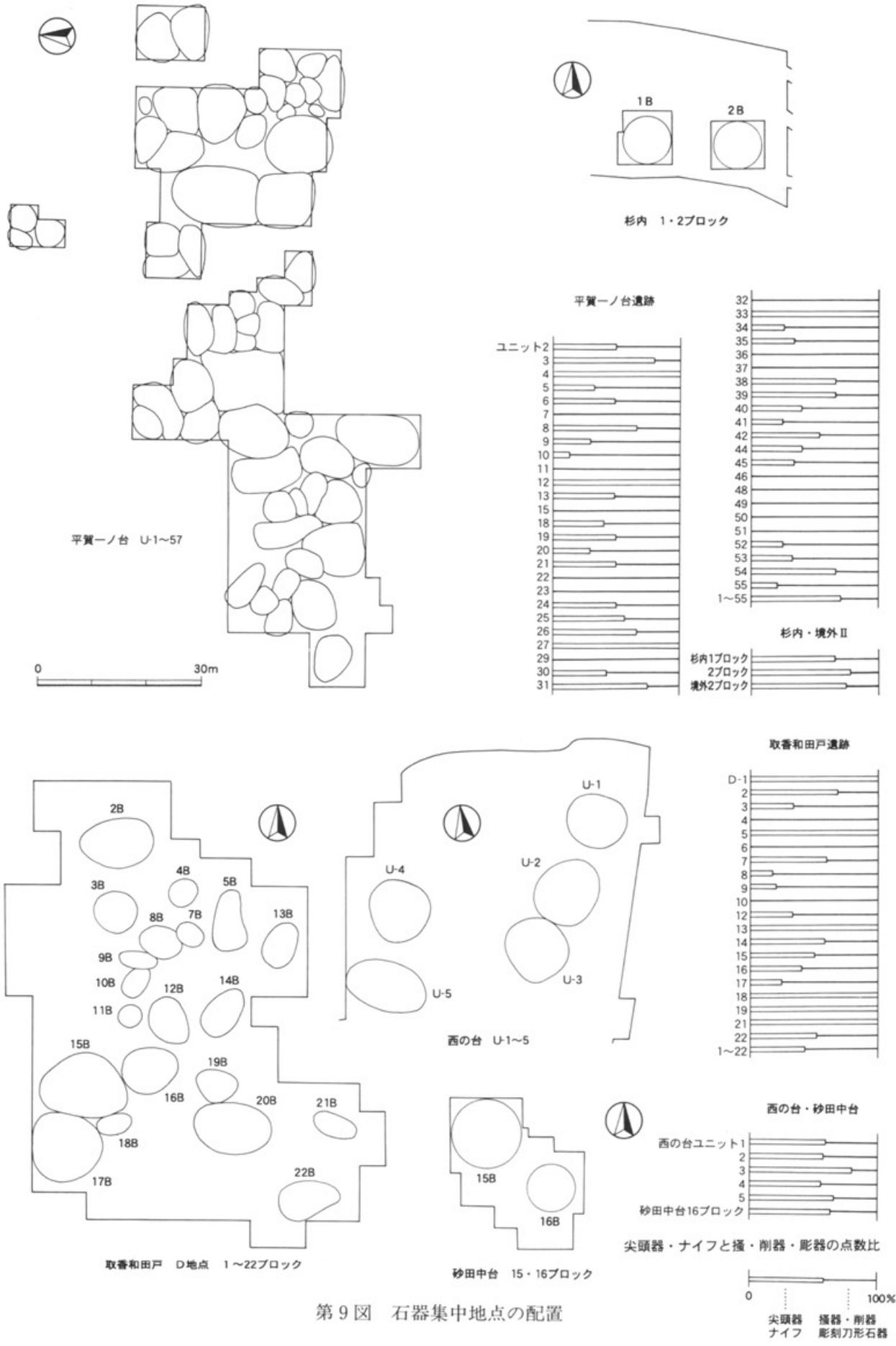
40前後の遺跡が該当する。その内容がバラエティーに富むという点は類型Bと同様であるが、有樋尖頭器石器群がかなり目立つ点は異なる。また、製品に偏った細身・大型の尖頭器を主体とした尖頭器石器群がある（元割遺跡）。点数的には1000点以上のもの、100～500点単位のもの、100点以下のものに大きく分かれる。1000点以上の赤坂・百々目木B遺跡には礫群が伴うが、他は全体的に低調であるものの、有樋尖頭器石器群には伴うものが散見される。

類型D 石器集中地点が1地点のみで構成される。

60前後の遺跡が該当する。その内容はバラエティーに富み、大半の遺跡が100点未満のものであるが、大綱山田台No.1遺跡のような大規模製作跡の存在や、黒曜石を主体とする小型尖頭器石器群・有樋尖頭器石器群には100～500点単位の遺物量がある。また、有舌尖頭器石器群、細身・大型の尖頭器石器群はほとんどがこの類型に属する点は注目される。尖頭器・尖頭器調整剥片を多量に検出する遺跡（検出点数も1000点単位）と製品中心の遺跡に大きく二分される。これらにともなう礫群は、あっても小規模である。

類型E 単独出土遺跡。

石器集中地点として認識できなかった遺跡は349遺跡を数えるが、その内訳は尖頭器B（有樋尖頭器）44点、尖頭器C（有舌尖頭器）204点、尖頭器A（尖頭器B・C以外）624点である。尖頭器Cは石器集中地点を形成する遺跡から91点しか検出されておらず、その分布も特徴的で、下総台地全体に拡大する。分布状況はそれまでの旧石器時代的なものとは一線を画するものであり注目される。また、有舌尖頭器・細身・大型の尖頭器については、このような単独出土が一つのパターンとなっており、無視できない存在である。



第9図 石器集中地点の配置

(4) 主要な尖頭器石器群の特徴

ここでは尖頭器石器群の内、ある程度安定した遺跡数が見られ内容が保証された、いくつか特徴的な石器群に焦点を当て、以上の検討をもとにその特徴を指摘し、まとめにかえたい。

黒曜石主体の有極尖頭器石器群

黒曜石を素材とした有極尖頭器は、木苧峠遺跡・大林遺跡・御山遺跡・赤坂遺跡のように石器集中地点を形成する遺跡と、白井第1遺跡や百々目木B遺跡のように製品の単独搬入、もしくはそれに準ずる搬入形態が見られる遺跡に分かれる。

前者は類型1・3に分類され、バイフェイス・リダクションを基調としながらコア・リダクションによる原石消費が見られる石器群であり、遺跡内には荒割り原石・ブランクの搬入形態が基本である。黒曜石はほぼ例外なく高原山産のものが用いられている。木苧峠・大林・御山遺跡は鹿島川流域の西側に偏在する(第10図)。非黒曜石製有極尖頭器を持つ大規模な遺跡が鹿島川水系の東側に位置するのと対照的ではある。また赤坂遺跡では、黒曜石以外の石材を少なからず持ち、嶺岡頁岩をはじめとする多様な石材が搬入され原石消費は多様である。礫群もその他の遺跡ではやや低調であるが、赤坂遺跡では前項で見たように多量の破碎礫の密集域がみられるなど注目される。石材構成の多様性と礫群の形成は関連があるのかもしれない。

後者は類型2に分類された。白井第1遺跡のように信州系黒曜石を用いた単独母岩の有極尖頭器が高原山系の黒曜石による剥片類とセットになっていたり、百々目木B遺跡のように嶺岡頁岩を用いた石刃石器群とのセットだったりする。黒曜石の製品にはほぼ例外なく信州系の石器が用いられており多くの有極尖頭器の形態が左右対称形である点も見逃せない⁴。

以上、黒曜石製有極尖頭器を持つ石器群において、高原山産黒曜石によって石器集中地点を形成する『遺跡内原石消費型』の石器群と、信州系の黒曜石を用いた『製品流通型』の石器群の2者を把握するに至った。

非黒曜石主体の有極尖頭器石器群

下総台地の中心部を樹枝状に開析する鹿島川流域に多くの遺跡が集中し、その他は流域外縁に分布する。大規模な遺跡については鹿島川流域の東側に分布する傾向がある(第10図)。

石器集中地点が20以上検出される遺跡(類型A)がみられ、いくつかの特徴を抽出できる。東内野遺跡・平賀一ノ台遺跡などが典型例である(第9図)。必ずしも両遺跡に共通するものではないが、1)多くの石器集中地点を持つ。一ノ台遺跡では58もの「ユニット」が報告されている。2)礫群・炉跡などの遺構を伴う。3)刃部再生、修正加工が顕著におこわれ、多量の尖頭器、削片、調整剥片を検出する。4)器種組成は尖頭器に限らず、搔・削器類・彫刻刀形石器などが主体となるブロックがあり、全体的には狩猟具に偏ることなく加工具類が安定して存在する(第9図)。5)石器集中地点毎に遺物点数、石材、剥片剥離等の内容がバラエティーに富む。

上記の特徴は、遺跡への回帰的な行動と拠点的な遺跡のあり方を示しているものと理解される。

このような大規模遺跡は稀で、1~数地点の石器集中地点を残す遺跡が大半を占める。それらの多くには尖頭器の調整剥片を主体とする密集した石器集中地点(類型1)はほとんど見られず、どちらかというところ、一般的な剥片剥離に基づく原石消費が主体を占めるといっても過言ではない(類型2 or 3)。礫群は小規模なものを伴うことが多く、これについては前項で指摘したとおりである。

全体を通して言えることではあるが、尖頭器製作の初期工程はほとんどみられない。製品はほとんど完成品に近い状態で持ち込まれたものと思われる。石材原産地近傍での製作が想定される⁵。

上記のような大規模な遺跡と小規模な遺跡の組み合わせは、石材獲得を包括した非常に複雑な状況を呈し、礫群の構築をはじめ、本石器群の特徴は、『複相的回帰型』とまとめられる。採集地点の異なる石材の獲得を含め、狩猟行動等の日々の行動は綿密な計画に基づいて行われたのであろう。

黒曜石を用いた（片面加工を主体とする）小型尖頭器石器群

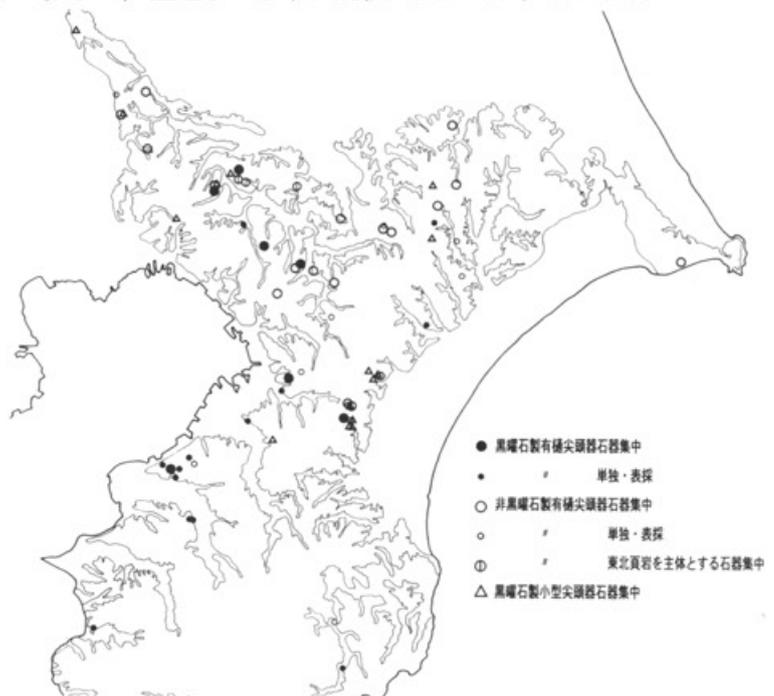
遺跡の分布は鹿島川流域の外縁を取り囲むような状況がみられ、有樋尖頭器石器群とは対照的である（第10図）。

この種の石器群は、荒割り・分割礫・ブランク段階の素材が遺跡に持ち込まれ、整形・仕上げ作業を集約的に行う大規模な遺跡が存在する。大網山田台No.1遺跡、西の台遺跡にその典型例を見ることができる。非黒曜石を用いた有樋尖頭器石器群とは大きく異なり、単一石材の特化、複数ブロックを有する遺跡において各石器集中地点の内容は大きく変わらない（西の台例）、尖頭器製作以外の臨機的な剥片剥離が見られる（類型3—大網山田台例）等の特徴が指摘される。一方で、このような大規模遺跡をそのまま縮小したような石器群の構成を見せるいわゆる小規模な遺跡が存在する。浅間台遺跡、砂田中台遺跡、東峰西笠峰遺跡（空港No.63遺跡）、森ノ木台遺跡、神々廻東原遺跡などが挙げられる。大規模遺跡に見られる調整剥片が密集した円形を基本とした分布形態はあまり変わらず、その密度・規模をそのまま縮小したような状況を呈するが、尖頭器調整剥片以外にも縦長の剥片剥離も見られるようで、この点も大規模遺跡の様相とよく似ている。

黒曜石の原産地は高原山のものと信州系のもの両者が見られ、黒曜石製有樋尖頭器に見られたような各原産地における利用状況に大きな相違が見られない。その要因については、今後の課題として追求する必要がある⁶。

大網山田台例以外は礫群はほとんど伴わない。また、上述したように規模の差はあれ、各石器群において狩猟具（尖頭器等）の占める割合が加工具（搔・削器・彫刻刀形石器等）を大きく上回るという構成はほとんど変わらない点も重要だろう（第9図）。

以上の特徴を持つ石器群は、有樋尖頭器石器群の『複相的回帰型』に対して、『単相的集約型』な様相を示しているともまとめることができようか。これは非黒曜石を用いた非有樋尖頭器（小型）石器群についてもほぼ同様の様相を指摘できるものと思われる。



第10図 有樋尖頭器石器群と黒曜石製小型尖頭器石器群の分布

注1 杉原重夫 1970「下総台地西部における地形の発達」地理学評論43-12 日本地理学会

- 2 両者は遺跡内では様々な構成を示し各遺跡の個性となっている。一本桜南遺跡第22~25ブロック・復山谷遺跡EⅢ1ブロック等では、後者の様相を色濃く残している。
- 3 一ノ台遺跡でこのような剥片剥離の為の石核はほとんどみられず、石材原産地近傍もしくは段階的な石核消費を想定した方が良いかもしれない。つまり大型の扇状削片や断面三角形の稜付き石刃は、石器として選択的に搬出され遺跡内に持ち込まれた可能性が高い。
- 4 他に信州系黒曜石を用いた有柄尖頭器が搬入されている遺跡、単独出土の尖頭器検出遺跡には、平賀一ノ台遺跡・角田台遺跡・境No.2遺跡・上大城遺跡等が挙げられる。ただし香山新田中横堀遺跡（空港No.7遺跡）では、製品以外に、調整剥片・削片等も伴うなど若干異なる様相を示しているもののその規模は小さく、一般的な剥片剥離が行われた痕跡は極僅かである。
- 5 東北産と思われる珪質頁岩を用いた石器については、このような特徴を指摘することができるが、嶺岡頁岩・安山岩等の遺跡内で剥片剥離が見られる石材を用いた石器群については、尖頭器・ナイフ形石器・彫刻刀形石器・削器類などの製品製作を遺跡内に見ることができる。
- 6 高原山産黒曜石は大綱山田台No.1遺跡・浅間台遺跡、信州産黒曜石は砂田中台遺跡・桐ヶ谷新田遺跡・西の台遺跡・東峰西笠峰遺跡（空港No.63遺跡）において主体的に用いられている。